
Life Is Reborn

GETTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Life Is Reborn

【NZコード】

N9446C

【作者名】

GETTER

【あらすじ】

人類の未来を守るため、己の命を犠牲にして散つていったTF戦士、ダイノボット。彼がふと目覚めると、なんと人間の姿に変わっていた。そして、彼が第一の生を歩む場所は……麻帆良学園であった。

プロローグ【生まれ変わった日】（前書き）

どうも初めまして、作者のGETTERと申します。
この作品は『ビーストウォーズメタルス』と『魔法先生ネギま。』
のクロスオーバー作品です。その点を了承してお読みください。

プロローグ【生まれ変わった日】

【SIDE・俺】

体が動かない。あちこちが痛い。思考回路もあまり反応を示さず、簡単な返事しか返せない。

アイセンサーに砂嵐が徐々に広がり、目の前の光景がボンヤリとか見えない。辛うじて見えるのはこんな俺を受け入れてくれた大切な仲間達の悲しい顔だ。

「良くやつた、ダイノボット。お前はこの谷を救い、未来を救つたんだ」

ああ、俺の名前はダイノボットだったか。ダメージが限界を超えるきて思考回路があまり働かねえんだよな。

メガトロンの野郎、最後にキツイ一撃を喰らわせやがって。でも奴の歴史改革と言う野望を阻止出来たし、胸に傷跡も残してやつたから良しとするか。

そんな事を身体中が痛い中、考えているとコンボイが隣に居たラットルを俺の前まで連れてきた。

「アンタ、声も態度もデカイ口裂け恐竜だけど……ガツツは良い奴だつたよ」

そんな今にも泣き出しそうな顔をしながら無理に言つたじやねえよ、このチビネズミ。

でもテメHともこれでお別れだな。

「良いゴロゴロンビだつたよな……俺達」

いつももつまらない事でケンカしていた俺の言葉にこいつは嬉しそうに「うん」と頷いた。
少しの笑顔を見せて。

つたぐ、無理しやがつて。

まだ少しだけここいらと話したいが、身体中の回路がビービー警告してやがる。

そろそろひりしこな。

「もう思い残す事はねえ。……あばよ」

生まれ変わつたらまたお前等の仲間になりてえよ。

お前等サイバトロンからは沢山の事を教えて貰つたからな。
友達や仲間を大切にする事、自然を愛する事、戦士としての生き様、
沢山の事を教えて貰つた。

あばよ。俺の……大切な……仲間達。

「…………やみい」

突然としか言いようがない。身体中に走るあまりの寒さに俺の意識は覚醒し、目の前の光景を見た。

木々が沢山生えてやがるし、空には月が出ているから今は夜らしかった。

……待てよ。

俺は確かに死んでトランسفォーマー（以下TF）の魂^{スパーク}が集まるマトリクスへと旅に出た筈なんだが……何故に俺はこんな所に居るんだ？

……まさかもう生まれ変わりをしたのか？

いや、生まれ変わらにはかなりの準備期間が必要だ。それより何より、マトリクスに辿り着くまでも、長く果てしない旅になる筈だ。

「訳解んねえ。俺は一体どうなつちまつたんだ？ しかもここは何処だ？」

とうあえず俺は立ち上がり、少し辺りを歩いてみることにした。周囲に警戒心を配りながら歩いてみたが、何もない。

「見た限り普通の森だな。農も何も無さそうだ」

そして俺が林の辺りに差し掛かると、ある物が見つかった。それは俺の愛用のサーベルだった。それが目の前で無造作に転がっていた。

確かに俺は戦闘用に必ず一本は持ち歩いてた。でも何でこんな所にあるんだよ……。

まあせつかく愛用の武器に会えたんだ。
置いていくのもなんだし、持ち歩くとするか。

「ダ？ 今更だけど俺の手つてこんな形だつたつけ？」

サーベルを持とうとした俺の手は明らかに小さい、と言つか形がおかしい。この手はまるで人間の様な……。
この手だと両方使わなければサーベルが大きすぎるし、重くて持てねえ気がする。

持ち手の方はなんとか収まる方だ。

「ダー、本当に今更なんだが……俺の姿つてこんだつたつけ？」

俺は今の状況を必死に整理した。俺の今の姿を確認してみると戦闘ロボモードでもない、ビーストモードでもない……と言つかりえん！？

何で「ゴールデンディスクに記された未来の記録でしか見た事がない人間の姿になつてんだ！？」ご丁寧に服までちゃんと着ているし！？

俺なりに色々考えた結果……今の俺の姿は人間と言う事だ。

「ダー、何だよ何だよ。本当に訳が解んねえ。死んだと思ったら人間の姿になつてやがるし」

まるで某人気漫画の大佐殿が言つた現象っぽい感じがする。
TFつて死んだら人間なるのか？ こんな体験は生まれて初めてだ。
まあ何回も死んでるわけじやねえし、当たり前だが。

突如起こつた事態に苦悩しているとグゥ～と腹の音が鳴つた。

こんな事態になつても体の方はお構いなし、らしい。

「腹減つたな……人間つてのは不便だぜ。TFの時はエネルギーパイプを繋げてジッとしてりや良かつたのに」

たまにライノックスがエネルギー物質を混ぜ込んだおでんやハンバーグ、カレー等を料理してくれたりした事もあった。そんなに工夫しなくても俺はエネルギー補給が出来ればそれで良かつたんだがな。

まあとにかく食い物を調達しに行くとしよう。こんな所で突っ立つたままで状況は何も変わらない。

そう決めた俺は更に先に進んでみる事にした。

「ふう……やつと川がある所に着いたぜ」

深い森の中をあちこち歩き回った結果、ようやく魚が生息してそうな川に辿り着く事が出来た。
月の光に照らされた川の水が妙に綺麗だつた。

更に森の中を歩き回つてゐる内に解つた事が2つあった。俺が居たのはひとつかの山である事。

そしてもう一つ、俺は人間の姿をしてゐるだけで身体能力は戦闘口

ボモードと変わらなかつた事だ。

それ故に今の体では大きすぎるサーべルも片手で持てる（持てないと思つてたけど）。

TFだつた時には普通のサーべルだつたが、人間の姿で持つと一種の大剣に近い。

人間の視点からすると俺の持つてたサーべルつてこんなだつたのか。……つと、今はこんな事を考えている場合じゃねえ。食料を探さねえと。

川を覗き込んだは手頃な魚がいるか見てみた。
影も形もない。魚も夜は眠つてゐるのか、それともここに魚は住んでないのか。

「ダ一、嘘だる。こんなのつてありかよ
「そこの御方、どうしたでござるか？」

「あ？」

後ろを振り返つてみると長身で変わつた服を着た人間の女が立つていた。俺が第一に注目したのは目だ。

細え、超細え、あれで物が見えてるんだろうか？

そんな俺の視線を感じ取つたのか、細目の女が俺の側までやつてきた。

「何処かケガでもしているのでござるか？」

心配そうな様子で俺に聞いてくる細目の女。
多少警戒しつつ、俺は言った。

「違う。突然山の中で気が付いて、スゲーありえねえことだらけで戸惑つて、腹が減ったから山道を歩き回つて、やつと食いモンがありそうな川に着いて、食える手頃な魚を探してみたら1匹もない事に絶望していただけだよ。……ダ—」

「そ、それは大変だつたでござるな」

言葉からでも解るが、細田女が俺に哀れみの視線を送つてきた。細田女め、そんな目で俺を見るんじゃねえよ。

「どうしたもんかなあ……俺」

「…………やつでござる。拙者はこれから夕食を食べる所でござるが、一緒にどうでござるか？ 拙者が調達した食料は1人えても困らないぐらいにはあるでござるよ」

細田女の突然の提案に俺は耳を立てた。かなり嬉しい申し出だが、甘えても良いのだろうか。

「…………良いのか？ 一緒に食つても」

「困つた時はお互い様でござる」

この細田女は結構良い奴かもしれない。

こんな所で絶望していた見ず知らずの男にここまでしてくれるとはない。

でも正直助かった。もちろん俺はこの申し出を受け、細田の女の後を付いていった。

細田の女に付いていくとテントが張つてある場所に着いた。どうやらここでコイツは寝泊まりしているらしい。

テントの側には焚き火の準備もしてあり、川から獲つたんだろう魚も何匹かあつた。

細田の女は手早く火を焚き、魚を串に刺して焼き始めた。

焼き終わるまで俺は只ジッと待つ。

腹の虫が鳴らない様に一応腹に力を込めておいた。

そして焼き終わった魚を細田の女は俺に差し出してくれた。渡された魚を遠慮無く俺は頬張つた。メチャクチャ美味しい。

遠慮無しに俺は渡された分だけの魚を綺麗に平らげた。

細田の女の方は俺のことばかり見てて2、3匹しか食べなかつた。

「美味かつたぜ。ありがとうよ」

「礼には及ばないでござるよ。一ソーン」

礼を言つても細田女は穏やかな態度を変えなかつた。

人間にしちゃあコイツは良い奴だ。

ゴールデンディスクを見た限りでは口クな生き物じやないと思つてはいたが。

もしかしたら人間にもサイバトロンの様に心の優しい奴もいるんだろ？

どの生き物でもこんな事は当たり前か。

満たされた腹をさすりながら俺はボンヤリと星空を眺めた。星がいくつも輝いていた。

天体観測が趣味のコンボイが好みそうな星空だ。

「紹介が遅れたで、じざるな。拙者は長瀬楓と言つ者で、じざる。お主、名は何と言つで、じざるか？」

長瀬楓つて言つのかコイツは。しかしどうあるべきか。名前を言つてやりたいが、本当の名前を言つて訳にもいかないだろ。ダイノボットだって言つた口には変わった名前だと認識されてしまう。

今は人間なのに、TFの時の名前のダイノボットと言つのは何がマズイ氣がする。

「悪い。お前の名前を教えてもらつておいてなんだが、今はまだ言えねえんだ」

俺の答えに長瀬は表情を変えずに「訳ありで、じざるか？」と聞いてきた。

その問いかけに俺は頷く事しか出来なかつた。

「セウで、じざるか。なら拙者は無理には聞かないと、じざる。お主が自分から話してくれるのを待つで、じざるのよ」

「すまねえな。助かるぜ」

色々と助けてもらつた長瀬に俺は罪悪感を感じずにはいられなかつた。

俺の事は近い内に絶対に話しておきてえな。

でも名前の件は深刻だな。TFの時の名前がダメなら人間の名前を考えなくてならない。

……良い名前を考えておこう。俺の足りない頭じゃ口クな名前は思いつかないかもしねえが。

「夜も遅いでござるし、今日は寝るとするでござるよ

「そうだな。心なしか、俺も何か疲れてきたし」

俺は長瀬から毛布を2、3枚貰つてテントの外で寝る事にした。長瀬は俺に「お休みでござる」と言ってテントに入つて行った。俺も少しの間を開けながらも、「ああ」と返した。

「明日になつてからまた考えるか。これからの事を……

毛布に体を包み、俺はまた空を観た。
さつきと変わらない様子の星空だった。

出会い系編・第1話【編入して良いのかよ】

【SIDE・俺】

「良い天気だ、快晴つて奴だな」

俺は日の出と共に目を覚ました。テントを覗いてみると長瀬はまだ眠っている。
だが、一見ぐつすり眠っている様にも見えるが、スキが一切見あたらなかつた。

コイツも戦士の様な臭いがするのは確かだ。
まつ、俺には適わないかもしねないけどな。

「山の中だからショミレーターなんかある訳がねえし…… しょうがねえ、自主トレをするか」

サーベルを片手に持つた俺は昨日の川に向かつ事にした。そもそも知つている手頃な場所はそこしか知らない。
そうだ、自主トレついでに魚も採つてくるとするか。長瀬があんなに採つてるんだから絶対に何匹か居る筈だ。

朝食も長瀬の世話になる訳にはいかねえし、少しごらいは礼をした
いしな。

サーベルの素振り、木に向かっての打ち込み等を一通りやり終えた後、俺は朝食の調達をする事にした。

川を覗き込んでみると昨日の夜とは違い、魚が何匹も生き生きと泳いでいる。

川に足だけ入った俺はサーベルで泳いでいる魚を的確に突いていく。仕留めていった。

「よしー、これだけあれば充分だろ」「

近くにある石に採った魚を置いていく。

10匹ぐらいは採ったな。これだけあれば朝食には充分だろう。

「しつかしまあ……俺が人間になるとこんな顔になんだな」

涼しい風に当たりつつ、俺は水面に自分の顔を写して見た。髪の色は茶色で目の中の色が黒色、左の頬にはやつぱりあると思つた3本傷。

この傷はコンボイと初めて出会った時、1対1の対決の時に出来た傷だ。

顔はまあ悪くはない。といって言えばごく普通だ。

身長もトランسفォーマーの時は2m以上をあつたが、人間になつても190cmぐらいはある。

「一人で何やつてんだか。わざと長瀬の所に戻りつつと

今自分がしていた行動に呆れつつ、右手にサーベル、左脇に採った魚を持って長瀬が眠っているテントに向かった。

それにしても魚が持ちにくいつたらない。ダンゴみたいにサーベルに全部突き刺すか？

「お帰りで」「やいな」

テントに着くと長瀬はもう起きたらしく、笑顔で俺を迎えてくれた。目は細いから視線は解らないねえが。

「おっ、朝食採ってきたぞ」「おお、かたじけないで」「やいな」

採ってきた魚を渡すと長瀬は焼く準備を始めた。流石に俺も見ていいだけではつまらないので手伝つ事にした。

2人でやると案外朝食の準備は早く終わり、串に刺して焼いていた魚もあつという間に焼けた。

相変わらず良い匂いがしてきやがるなあ。

俺がヴェロキラプトルをスキヤンした時には腐った生肉が好物だつた。

しかし今それを食つたら間違いなく腹を壊すだろうな。もしかしたら死ぬかもしれない

「やつぱり魚はつめえな」

長瀬から手渡された魚を受け取り、俺は豪快に頬張る。

味付けに振った塩の味と魚の味が口内に広がる。やっぱり美味しい。

「昨日と変わらず、豪快に食べるのでござるなあ。慌てて食べると喉に詰まりやすござるよ」

俺の豪快な食べ方を見ていた長瀬が苦笑いで言つてきた。
生憎だが、俺は今まで喉に詰まらせた事はない。

「男はやっぱり豪快に食わなくちゃな。チョビチョビ食つてたんじや割に合わねえんだ」

「やつでござるか」

たわいのない話をしながら朝食を食べる俺と長瀬。
こんなにゆっくりとした朝食を食べるのって久しぶりかもしれない
な。

「さて、拙者は山を下つるとするござるよ」

「そりか。ありがとよ、こんな正体の知れない俺を助けてくれて。
お前も勉強頑張れや」

実は昨日の夜、就寝前に暇つぶしに長瀬とお互いの事を話したりした（俺は口クな事は話せなかつたが）。
長瀬はこの近くにある麻帆良学園とか言う所の生徒らしく、まだ中

学生らしい。

まだホンのガキだったのに相当の実力を持つていると言つ所に俺は一番驚いた。

俺が背を向けてその場を去るひつすると長瀬が俺の肩を突然掴んできた。

「？ 何だ？」

「いやいや、お主も一緒にどうかと思つて」

……ダー？ 何で俺が長瀬と一緒に行かなればならねえんだ？

突然の事に俺の顔は多分間抜け面になつてると思つ。だつて誘われる理由が皆無だ。

「何で俺を誘うんだよ？」

「お主、昨日の話によれば行く所が無いのでござれひつ？ 拙者が通う麻帆良学園の学園長殿が仕事か何かを紹介してくれるかもしけぬ。どうでござる？ 学園長殿に一日会つてみるでござるよ」

「……」

何かここまでしてくれると俺がスゲエ悪者の様な気がする。かと言って本当の事を話す訳にもいかねえし、なにより信じてくれないだろつ。

でもここで断るとせつかくの厚意を無駄にしちまつ。

どうすれば良いんだ俺……。

「ヒヒが学園長室で、」
「ダ～……」

考えた末、俺は長瀬の厚意を受ける事にした。
山を下り、長瀬に付いていくと麻帆良学園とやらが見えてきた。

そしてその学園の「テカさ」に俺は驚いた。
これは一種の街だ。セイバートロン星の街とタメを張れるかもしない。

そして長瀬が通っていると言つ麻帆良学園中等部に向かい、学園長
が居る所まで案内してもらつた。
そんで今はその部屋の前に居る訳だ。

「失礼するで、」
「学園長殿」

長瀬が部屋の扉を開けて中に入った。

俺も続けて入つて行くと目の前に信じられない光景が広がつていた。

「んん？ 長瀬君か。ワシに何か用かね？」

「うわあー……見た目からして人間のじじいだろうが、あの頭の長さ
は何だ？」

「人外じやん。タコか？ タコの頭か？」

「何だ？ このタコと人間が混じつた様なじじいは？」

つい思つた事が口に出てしまつた。

俺の言つた事にこの空間の空氣が少し冷えた。

「タ「なんか混じつとらんわい！－－ ワシは純粹な人間じゃ－－－」

「嘘言うな－－ んな頭の人間がこの世に居てたまるかあ－－－」

「なんじやと－－！」

「が、学園長殿。落ち着くでござるよ」

顔を真つ赤にして怒るじじいに俺は《ますますタ「だ。いや、湯でダ「だ》と思つた。

今にでも頭から湯氣が出そなへりい怒つてゐるじじいを長瀬が必死に宥める。

何分か宥めた結果、ようやくじじいが落ち着いた。

「ふう……ワシとした事が。それで、お主は一体何者じや？」

「人に訊く時はまずテメエから「まあまあ。それは拙者から説明させてもらひついでござるよ」ぬべつ……」

長瀬がじじいと話してゐる。当然俺の事だろつ。

この部屋に居るんだからあのじじいが長瀬が言つていた学園長とか言つ奴なんだろが、本当に人間かよ。

俺が心中で毒を吐いていると一人の話が終わつたらしく、扉の近くに下がつていた俺はじじいに呼ばれた。

「まあ先程の事は水に流そつ。ワシは近衛近右衛門。この麻帆良学

園の学園長をしていふ」

変な名前だ。まるでタイガトロンが好きな時代劇に出てきやうな名前だぜ。

「長瀬君から話は聞いた。大変じゃったの」

「別に。もう氣にしてねえよ」

「ふむ、ワシとしても困つてこる者は見捨ててはおけん。君がここで何かしたいと嘗つなればその場を『えらいでもないが、どうあるかの』

死ぬまで戦士として戦つてきた俺にそんなモノを求めるなよ。それにやりたい事なんぞ何もねえ。

「特にやりたい事はない。それに無理しなくても良いんだぜ。自分的事は自分で何とかするから」

心からの本音だったが、じじいは困つた様な顔をしてきた。なんでそんな顔をされなくけやいけないんだよ。……。

じじいが頭を捻らせてくると良じに考えが思いついたのか、急に表情が明るくなつた。

何か口クでもない考えの様な気がするのは『氣のせいだ』ひつか?

「どうじや? ここで学園生活をしてみないかの? 腹は見た田若やつじやし、中等部でも通用するかもしれん」

「…………ハツ?」

何を言い出すんだこのじじいは。俺にもう一回学生をやれと。テストロンだった時に経験した学生をやれと?

「何言つてゐるんだよ。長瀬から聞いたけど、ここは女だけが通つ所だろ? 男の俺が通える訳がねえだろ?」

「もちろん出来るなら男子の方へ編入したいんじやが、生憎『』の

クラスも人数が多くて満席での。唯一空きがあるのが「」だけなんじや。まあ丁度男女共学の事を考えておつたし、お試しと書ひ事で「ひづやひづか」

「くしまー……」のじじこの背中に黒い何かが見えやがる。明らかにひづやの悪口を根に持つてるとしか思えねえぞ。

「ひづあるくじや？ ん？ ひづあるくじや？」

「この嫌味な聞き方は何だ？ 意外に執念深いじじだ。

それにこの雰囲気からすると申し出を受け入れるしかねえじやねえか。

「分かつたよ……何処へでも編入しやがれ」

「そりかそりか。それは良かつた。ワシに出来るのは「」が
やからな

「良かつたで「」だねな」

「ハハ……そりだな。お前等にしてみれば良かつただろ？ が、俺にと
つては最悪だよ。

経験済みの事をもう一回やるんだからな。

「しかし「」が何の。名前も言つても「」ないのは困るのう。
色々と不便じやつ……こつその事、仮の名前をワシが命名じやめお

うか

「お、おこ……」

「今まで世話をせんでもええわ！ って言いたい所だが、実際人
間の時の名前を思いついてないのが現実だ。

「」の際だから命名してもらうか。俺が考えたんじや変な名

前になつねつだし。

「あー……それでも良いぜ。但し、良こ名前にしみるよ」

「本当かねー。ワクワクするの、どんな名前にしみつかのーー」

自分の横にあるバカでかい本棚から色々と本を取り出して、ページを捲つていぐじじー。

名前を付けるぐらこでせんに嬉しがるか普通。

「あつと生まれた孫に命名する気分なので、いやもうな」

「あんなタコの末裔みたいになじじいの孫にはなりたくないねえがな」

本を読み終わった後も顎の長いヒゲをわすつ、考えてこるじじい。
「やつやつ読んだ本の中には良こ名前は無かつたりじー。

「名前、名前、名前…………」

「おーい。そこまで真剣に考えなくとも良こやつー」

俺が声を掛けてもじじいはどつか別の世界に意識が飛んでいる様子だ。

長瀬に助けを求めても長瀬は困つてこねらしく、冷や汗をかいていた。

れつねと決めてくれよ。

や前ぐらいであまり時間を掛けるなよな。

「…………、わむ、決めた！」

「わむわ、やつと決ましたか……」

「わむ。今日から君の名前は“忍山剣山”で決まりじゃ」

な、なんだか元の名前とそう違わない様な気がする。それに俺のビーストモードから名付けられた気もする。んなことは絶対にあるわけねえが。

「学園長殿、何故にその名前としたのでござるか?」

「つむ。昨日ワシが暇つぶしにやつた有名ゲームの主人公からじゃ

「…………」

ゲームの名前からかよ。なんつー無理矢理で適當な。でも一応決まつた訳だし、とつあえずは良じとしよう。

「名前が決まつたのは良いんじゃが、どこのクラスに編入させようかの」

「そこら辺はもうじこさんの好きにじる。俺は何でも良い。それで良いのならそうする。それと君は今日何処で生活するんじや? 部屋を用意することしても明日になつてしまつが」

そんな事は別にどうでも良い。また山に戻れば過ぐせる。その事を言おうとしたら長瀬に手で口を塞がれてしまつた。

「それなら拙者の部屋に来れば良いでござる。他に二人ほど住んではいるが、一人ぐらいは大丈夫でござるよ」

「あいあい! 流石にそこまで世話になる程俺は落ちぶれてないぞ。断ろうとしたが、言こぐるめられて無理矢理了承させられてしまつた。情けねえ……。

「それでは拙者の部屋に行くでござるよ。ダイノ殿」「解つたよ……」

「仕方ねえだろ、不本意なことばかり続いてんだから。」
「仕方ねえだろ、不本意なことばかり続いてんだから。」

「編入先については明日伝えるから早めにここに来るんじゃぞ」「へえへえ……了解しました」

「もう脱力していて体に力が入らん。流れに身を任せるとかない。学生になつちましたが、これから一体どうなるんだよ。」

【SIDE・近衛近右衛門】

「ふむ……奇妙な青年じゃつたな」

最初の印象もそう、奇妙な青年としか言いようがなかつた。
あの青年からは何か普通の人間とは違う不思議な何かを感じる。
それに長瀬君が言つていた持ち前の高レベルの身体能力や素性も氣になる。

実際あのドリルの様な刃をした奇妙な大剣を軽々と片手で持つてい
たし、力も相当な物じや。

「ダイノ君か……見た限り悪い青年ではないかもしけんが、暫
くタカミチを監視に付けるとしようかのぉ」

実際こここの生徒になつたからにはヤンワリと行動を起こす事は出来ないとは思うが、警戒はしておくに越したことは無い。

部屋に招き入れた長瀬君も警戒はすると思うし、長瀬君も相当の実力者じやからな。

今はとりあえず様子見、じやの。

出会い系編・第2話【破天荒なクラスだな】

【SHIDE・俺】

「朝食が出来たで」「やる。早くテーブルに着くで」「やるよー」

「はーー」「

「今行くです~」

朝食の良い匂いが俺の鼻をくすぐり、食欲をそそる。
長瀬の部屋に一泊した俺は既に朝食が並べられているテーブルに着いている。

「今日も美味しそうです~」

「ちゃんと顔と手は洗つたで」「やるか?」

「うん。バツチリだよ」

どうやら長瀬がこの部屋で主導権を握っているらしいへ、同室のチビ双子は素直に長瀬の言ひ事を聞く。

『見た目からしてもここは等は上下関係がハッキリしてゐるもんな』

俺がこの部屋に一泊すると長瀬が言つた時はチビ姉妹のテンションが急上昇、快く迎え入れてくれた。

その時のテンションの高さは思わず女版のチータスを思い浮かべてしまつた。

快く俺を迎えてくれたのは別に良いんだ、うん。
だがチビ姉妹はイタズラ心と言つモノを少しばえられないのだろうか。

チビ姉妹がするイタズラはハツキリ言つてラトルより質が悪い。実際昨日寝るまでに3回ぐらいキレそうになつたが、すべて長瀬が「まあまあ」と俺を抑えた。

「やつぱり楓姉の『』飯は美味しい～」

チビ姉妹の姉である鳴滝風香、長瀬の作った朝食を美味そくに食べている。

俺は主にコイツが仕掛けるイタズラに困らされている。

「本当です～」

チビ姉妹の妹である鳴滝史伽、『』ちらも姉と同様に美味そくに食べている。

コイツの仕掛けるイタズラは姉と比べるとまだ可愛いモノだ。

しかし『』等が協力すると話は別、イタズラは凶悪化する。個人個人のレベルならまだ我慢出来る方だが、協力されると本当に質が悪い。

長瀬もよくこの2人と暮らせるもんだ。

「朝食べぐらい静かに食えねえのか？ お前等は『』

「もう、そんな固い事言わないでよケン君

「朝からそんな不機嫌な顔はダメです～」

「名前を略すな。それと俺の顔はいつもこんなモンだ」

この部屋に来てこのチビ姉妹は俺の呼び方を“ケン君”で定着させた様だ。

好きに呼べと言つたが、流石にお前等それはないだろ？。

まだ長瀬が言う『剣山殿』の方がずっと良い。でもチビ姉妹の『ケン君』とラトル達が呼ぶ『口裂け恐竜』や『しましま恐竜』や『ダーダー野郎』と比べると遙かにマシだが……。

とまあ、下らない事を考えている内に朝食を食べ終わった俺はじいの居る学園長室に行く事にした。

今日は俺が編入する事になるクラスを言に渡されるからだ。

「じゃあ俺はもう行くぞ。この寮の他の連中に見つかっちゃうからな」

「あいあい。気を付けて行くで」さわるよ

「ケン君！ 中等部に来て僕達のクラスメイトになれるといいね」

ああ、それは万が一にも無いだろう。つーかお断りだ。

学園通つてまでお前等のイタズラ攻撃を受けたくないからな。

「入るぞ。じじい」

俺が学園長室に入るとじじいの他にメガネを掛けた中年の男と子供の2人が居た。

何者だと俺が一人を凝視していると中年の男が俺に声を掛けてきた。

「やあ、学園長から話を聞いているよ。僕はこの学園の広域指導員をしている高畠・ト・タカミチだよ。よろしく」

握手を求めてきたので俺はそれに応えた。

握手して解ったが、この高畠と言つ男は穏やかそくな顔をして結構な実力者だ。

長瀬といい、高畠といい、面白い奴等が揃つてやがる。案外この学園に編入と言つ話を受けて良かったかもしない。

「フォフォフォ。剣山君、紹介しよう。君のクラスの担任のネギ・スプリングフィールド君じゃ」

そう言つてじこは高畠の隣に居た子供を前に出して紹介した。

……「これは流石にマズインじゃねえのか？
兵士として育てるなりともかく、こんな子供が担任をしてくるだと？」

まあ男の俺を共学のお試しか言つて女ばかりの所へ編入させるべらっただ。

このじこさんは面倒な奴等にバレなければ良いとでも思つてるんだ
るひ。

「ここにちわ。中等部3・Aの担任をしてくるネギ・スプリングフィールドと聞こます。これからよろしくお願ひします、剣山さん」

「あ、ああ……よろしくな

意外に真面目だ。大抵の子供と言つたらクソ生意気な奴等が多い（俺が思う生意気な子供と言えばラットルとかラットルとかラットルとかラットルとか……）。だがコイツはまったく違う。

ネギ先生……か。見た目は頼りなさうだが、案外かなりやり手つ

ぽいな。

それにして中等部のクラスの連中と俺は上手くやつていいけるだらうか。

ぶつひやけ言つとあまり自信が無い。元々俺つて付き合つて言つモンが苦手だ。

せいぜい派手なケンカとかは起つさない様に気を付けるとするか。

だが3・Aつて何処かで聞いた様な気がする。

それもとつても近い内に。

「では剣山君。そこにある制服を着てくれたまえ。それと横に置いてある通学バッグには教科書類が入つてあるから確認しておくんじやぞ」

「分かった

頭の中では3・Aと言つ言葉を思い出そうとしている時にじじいから声を掛けられてしまい、途中でシャットダウンした。
おしい、もう少しで思い出せたかも知れないのに。

仕方なく、じじこの言われるままに俺は隣の空き部屋に行って制服とやらに着替えた。

着替えたんだが…………慣れねえ、こいつ堅苦しこのはやつぱり全然慣れねえ。

人間の姿になつても慣れねえ。つーか慣れる訳がねえ。

「うわあ、とても良く似合つてますよ。剣山さん

空き部屋から出でてきた俺の姿をそそく褒めてくれるネギ。

それは世辞なのか？ それとも本音か？

正直俺自身は全く似合つてゐるとは思つてはいない。

逆にこいつのことは息苦しくてしょうがない。

俺が内心そういうのは息苦しくてしようがない。

「頑張るんじやぞ。剣山君」

「ああ。ボチボチ頑張るよ」

じじいと高畑に軽く頭を下げ、俺は教室に案内して貰ると西川が
ギの後を付いていった。

「いーです」
「いーかあ」

案内してもらひ、3-Aとプレートが付いた教室の前に俺とネギは
居た。

それにも中は騒々しいな。他の教室の奴等は静かなのに、この
クラスだけ別空間って感じだぞ。

「それじゃあ僕が呼んだら教室に入つて下さい。それまでに自己紹
介のこととか、考えておいて下さい」

「ああ」

ネギが教室に入るのを見届けて俺はとりあえず深呼吸をした。

これから周囲が俺以外全員女の未知の教室で生活する事になる訳だ。

しかしそれなりの覚悟と言つたが、決意つて物がいる。

俺が深呼吸を繰り返しているとネギから「どうぞ、入ってきて下さい」と聞こえた。

最後に深い深呼吸をしたあと、俺は意を決して教室の中へ入った。

『何だ!?』この静けさと俺の身体中に感じる視線の数は…?』

俺が教室に入るとさつきまで騒がしかった教室が静寂に包まれた。さつきの騒がしさはどう吹く風、と言つた所か。

ものスゲエ居づらさを感じつつ、ネギが居る教卓の所まで行つた俺は一応身体を整えた。

「僕達の新しいクラスメイトです。剣山さん、自己紹介をお願いします」

内心冷や汗をダラダラ流していた俺は数秒間ネギへの返事に遅れた。そしてテンパリつつも、俺は自己紹介をする事にした。

「あ～……新しいこのクラスメイトになる悪山剣山だ。何というか……よろしく」

「「「」」」

『だから何で静かなんだよ!?. サつきみたいに騒げよ!?. 俺がメチャクチャ氣まずいんだよ!?. 俺の気持ちを解れよ!?.』

「ちょっとお待ち下さいネギ先生!」

なんか前に座っていた金髪の女が席を立つて机をバンと叩いた。

うんうん、良いリアクションをしてくれる。

いつまでも固まってくれたままだと流石に困るんだよな。

「何で男子生徒の方が女子中等部に！？ 私は納得がいきませんわ！？」

「いいんちよさん落ち着いて下さい。これには深い事情があるんです。学園長先生もその事を解っています」

ネギが俺の事を連中に説明し始める。

男女共学の事を話すと教室中が少し騒がしくなった。

そんなに驚くなよな ん？

「…………（ニコニ）」

「「ヤツホー」」

俺の目は幻覚を見ているのだろうか。

なんか俺に向けて手を振っているチビ姉妹とニッコリ笑いながら俺の方を見ている長瀬の姿が見えた様な気がした。

目を擦つてもう一度見てみるが、光景は変わらない。

『そつだつた！ 3・Aと書うのはあいつ等のクラスだつた』

今更思い出した自分に若干アホを加減を感じる。

何で思い出せなかつたんだるつ。

……途中で思考をシャットダウンしてくれやがつたじじいのせいいか？

「学園長の決定なら仕方ありませんわね。少し不安はありますが…

…」

俺が長瀬達の方を呆然と見ているとネギの説明が終わつたらしい、

最初に抗議した金髪女が納得した様子で座った。他の奴等からも「男の子か~」や「なかなかイケてる感じ?」とかの声が聞こえてきた。

まあ男が転入してきたら驚くのが普通だらう。まだ腑に落ちない奴等が居てもしようがない。

「それではですね、剣山さんの席ですが……何処にしましょうか?」

「あ~……右端の一一番奥でいい」

「分かりました。じゃあそこに座つて下やー」

「へいへい」

バッグを持つて俺は右端で一番奥の席に座つた。

そこまで行く時も座つた時も視線がスゲー集まりやがる。そんなに見つめてくるな。

「それではHRを終わります。1時間目の授業の準備をしてて下さいね」

ネギがそう言つて教室から出て行くと俺はすぐさまクラスの奴等に囲まれ、色々と質問をされた。

俺つてこいつこいつのは苦手だから勘弁してほしいんだが、初日からクラスの気分を害したくはない。

出来る限り、俺は答える事にした。

「趣味は何?」
「体鍛える事だな」
「好きな食べ物は?」
「……肉だな。よく焼いた奴」
「どうしたらそんなに身長が高くなるの?」

「体鍛えてりやなるぞ」

「恋人持ち?」

「《恋人?》そんなモンはいねえ」

数分間の質問地獄が終わり、俺は若干狼狽した。

初日からこんなに狼狽するつて、どういうクラスだ?

しかも気が付けば授業の始まりの時間じゃねえか。
ダーワン 馴染めるかなこのクラス。

出愈い編・第3話【監視されたので、嫌な気分だな】

【SHIDE・俺】

「さみー……」

え～監さんこりんちにわ。ダイノボット改め恩山剣山です。只今時間は解りませんが、夜です。お空の月が綺麗です。吹く風がとても寒いです。

地面に長い時間座りこんでいたからケツがめつた痛いです。

何で俺がこんな所にいるのか　それは少し前の時間に遡る。あのじじいが変な決定を下さなきやなあ……。

「俺の住む部屋が用意出来たって本当か？」
「そうじや。部屋には家具などが設置し終わつたから見に行くと良いぞい」「

3-Aに来て初めての授業が終わり、俺はじじいに呼ばれた。前に約束していた俺の住む場所の準備が完全に整つたらしい。俺はさつそく部屋を見に行こうと、じじいから手渡された地図を手にそこへ向かった。

どんな部屋になんだろ? 俺からしてみりや、なるべく広い方が

良いんだけど。

「ダーラー……しつかし」の道は何だか知つてゐるような気が……

部屋に向かう俺は地図に記してある道を歩いていく内に奇妙な違和感を覚えた。

何故なら自分が今歩いている道は今日の朝に通つた感じがめちゃくちゃするからだ。

もちろん長瀬の部屋に一泊した時も同じような道を通つた気がしないでもない。

目的地に向かえば向かう程、違和感が強くなつてくる。

そしてを目指していた目的地に着いた時、俺の違和感は現実になつた。

「おーおー……マジかよ

まさしくこの地図が指しているのはこりだ。一泊した女子寮だ。
この女子寮の中に俺専用の部屋があるらしい。
あのくそじじい……本当に何を考えてやがる。

「今日で色々なイベントが起つすぎだ……どつかで休もう

地図をクシャクシャにしてポケットに突つ込み、俺は何処か休める場所を探した。

流石に色々とあつすぎて何だか精神的に疲れた。

そして、ずっと座つて休んでいて今に至るわけだ。

「今からストを起こして住む所を変えさせてもうつか？ いや、あのじじいの事だ。最悪住む所を用意してくれなくなるかもしけねえ」

俺がこれからどうするか途方に暮れていると後ろに何者かの気配を感じた。

何だよ、俺の今の機嫌は最悪だつーの。今の俺に近づくじやねえつての。

「何なんだよいつ……たい……」

俺はイライラしながら立ち上がり、気配がした後ろの方を振り向いた瞬間絶句した。

何だか訳の解らねえ怪物が口から口ダラレを垂らして俺の方をジツと見ていたからだ。

しかも距離にして数m、これはやべえな。

【キシャアアアー！】
「ダアーッとー！」

怪物が俺目掛けて爪を振り下ろしてきた。が、当然の如く俺は避けやつた。

1人の戦士として、あんな//H//Hの攻撃をむざむざと受けはしない。

狙つた俺を引き裂けなかつたのが不満なのか、怪物は低い唸り声を出した。

「こ」の野郎……今の俺の機嫌は最悪だつてのこ。まあテメエも運が悪いな、ちょっとばかしウサ晴らしをさせてもらひつ。

俺は指をパキパキ鳴らし、構えた。愛用のサーベルは朝出る時に瀬の部屋に置いてきたので手元に無いが、どうつて事はない。俺の専門は戦闘、主に格闘戦だ。

今は人間だが、姿が人間なだけであつて身体能力等はTFだった頃と変わりはない。

流石によく使つていたレーザーは出せねえけどな。

「おつやー！」

俺は怪物の顔に狙いを定めて飛び蹴りを見舞つてやつた。

蹴りは見事に直撃、怪物は顔を押されて後ろにドッと倒れた。

歯も何本か折れたらしく、地面に転がつてている。

【グオオ！】

トドメを刺そぐと近づいた瞬間、怪物が瞬時に起きあがつて俺に拳を振るつた。

流石の俺もその不意打ち攻撃は避けきれず、攻撃を喰らつて吹き飛ばされた。

「痛てて……ん？ あんまり痛くねえ。木がクッショーンにでもなつたか？」

不思議な事に、あまり痛みは感じなかつた。かなりの勢いで吹き飛ばされ、木に叩きつけられた筈だ。

これは俺なりの推測だがもしかしたら打たれ強さもトランプオーマーの時と変わらないのかもしれない。元々の身体能力も変わつてない訳だしな。

まあ早い話、俺自身にあまりダメージは無い。服が破けて血が少し出ただけだ。クッショוןになつた木も結構折れていた。でもぶつ飛ばされた事に変わりはない。

怒つた俺は逆襲に飛び膝蹴りを再び怪物の顔面に見舞つた。

「まだまだ！」

飛び膝蹴りを喰らつてまといつている様子の怪物の腹に拳打を何発も打ち込む。

自慢じやねえが、腕力だけなら俺はメガトロンにも匹敵する。

拳打を何回か打ち込むと、怪物は氣味悪い色の血を大量に吐くと倒れ、動かなくなつた。

「つたぐ、編入初日にこれかよ。氣色悪い怪物だぜ。オマケに少し臭えし」

「やあ。見事だね」

俺が鼻をつまんで動かなくなつた怪物を観察していると奥の林から声が聞こえた。

そこから出てきたのはじじいやネギと一緒に居た高畠だつた。

「見てやがつたのか。……つて、おい！ 見てたのなら助けるよ。生徒がこんな怪物に襲われてるつてのに！！」

「助けに行こうとしたら君があまりにもそれと互角だつたからね。僕の出番は無いと思って観戦してたんだよ。でも流石に君が吹っ飛ばされた時は焦つたな。ハハ」

「……」

何そんな普通に笑つてんだよ。圧倒してたからと言つて助けに来て

くれても良いじゃねえか。俺が怒り心頭の状態でいると急に高畠の目つきが変わった。

「君は……本当に一体何者なんだい？」

「……それはどういう意味だ？」

「言葉の通りだよ。今の無茶苦茶な戦い方からすると、普通の人間とは到底思えない。」

「…………」

確かに高畠の言葉は正論だった。

普通の人間だつたら、あの気味悪い怪物を素手で倒せるわけがない。元々TFだつた俺だからこそ、倒すことが出来たのだから。

「ちなみにこの事は、君を手助けしてくれた長瀬君が言つていたんだ。君からは普通の人間とは違う、何か異様な物を感じるつてね」

あの一人もずっと前から気づいていやがつたのか。
気づいている感じはしなかつたが、あの2人……とんだ狸だな。

「そうか……何ですぐに始末しねえ？　お前等が言つて、こんな得体の知れない俺を」

「僕らもすぐにそんな乱暴な事はしないさ。長瀬君が言つていた君から感じる異様な物が気になっていたんだ。学園長も君に長瀬君に言われて初めて気づいたようだけ」

異様な力ねえ……確かにこいつ等程の使い手なら俺からそんな感じがするんだろう。

なんせ俺は元TF、機械生命体だからな。

「かあ……こんな異様な力を持つ俺をここら辺に野放しにしたく

ねえから、自分の手元に置いておきたいがために、俺をこんなところに編入させやがったってわけか。あのじじい、なかなか悪知恵が働きやがる

「それを言わると学園長も形無しだね。とりあえず話を戻すけど、君は一体何者なんだい？ 君がこここの生徒になつた以上、僕も1人の教師として手荒な真似はしたくない。正直に本当の事を話してくれないか？」

高畠が真っ直ぐな目で俺を見てくる。思わず本当の事を喋ってしまいそうながらいだ。

だが、今はまだ話す時じゃない。と直つか話せない。近い内に話をうつは思つてゐるが、その時は自分で決めたい。

「悪いが、まだ本当の事は話せねえ。ついで今話しても信じてもらえねえと思うから話せねえんだ。俺も自分自身に起きている状況が半信半疑だからな」

「…………」

「だけどな、これだけは言つておくぜ。別に俺はここで何かをやらかすなんざ考えてねえからな。お前等に迷惑は一切掛けねえよ」

俺はビシッと高畠に指を指して宣言してやつた。

変な疑いを掛けられてこいつ等と戦うのは御免だし、殺されるのはもつと御免だ。

俺が宣言して暫くすると高畠が小さな声で笑い始めた。

何か俺は変な事を言つたのだろうか。

「僕と学園長はそこまで考えていないよ。実は学園長に頼まれて君の事を監視していた。とてもじゃないが、君がここで何かをやらかすとは思えなかつたね」

監視してたのか。つーかそこまで思われていないと逆に腹が立つ様な気がするのは気のせい? いつそ本当に何かやらかしたろか?

「とりあえず今日の件は学園長に報告しておくよ。剣山君はとりあえず問題の無い生徒だとね。暫く監視してくれって頼まれたけど、これなら今日中に取り消しになりそうだね」

「ああ、そうしてくれ。これ以上あのじじいに翻弄されるのは嫌だし、アンタに監視され続けるのも真つ平御免だ」

そう言つて俺に高畑に背を向けた。さつやとじんなどじゆから立ち去りたい。

さみいし、しょうがねえから大人しく、女子寮の部屋に行くか。

「ああ、そうだ。早く女子寮に戻つた方が良いよ。君が寮で暮らすと聞いて、3・Aの皆は歓迎会を開くらしいからね」

「歓迎会……?」

歓迎会か。脳天気な連中だな。

……でも悪い気はしねえな。

「教えてくれてありがとよ。急いで寮に向かつとするぜ」
「どういたしまして」

高畑の奴、何だかコンボイと同じ様な感じだな。
まあそれは置いておいて、早く帰るとするか。

そうだ、長瀬の部屋からサーベルも取つてこねえとな。
忘れない様にしどうつと。

出会い編・第4話【報酬が欲しいからなあ。面倒だけど】

【SIDE・俺】

チャイムが鳴り、午前の授業の終わりを告げた。それと同時に俺に
とつては至福の時間の始まりを告げるチャイムでもある。
基本的に俺は昼食を一人で食べる。最近はクラスの奴等から一緒に
食べないかと誘われたりしているが、俺は全て断つていい。
何故なら俺はある場所でゆっくりと食べると決めていいからだ。

その場所は……。

「やっぱ屋上だよな。今日はまだ遅くなつちまつたけど

買つてきた昼食のパンやおにぎりを手に屋上への階段を上る。俺が
食べている場所は屋上なのだ。何故か昼時にはあまり人がやってこ
ない。

なので一人でゆっくりとした時間が満喫出来る。昼食を食べた後の
昼寝も最高だ。田がポカポカしていて気持ちが良い。

「さてと。こつもの時間を過ごすとすつか

ウキウキ気分で扉を開ける俺。

すると目の前には信じられない光景が広がっていた。

「……」

先客が居た。しかも見た事のある顔だ。確かあいつは俺の前の席の

……ザジ何とかと言つ名前だつた気がする。まああのペロロメイクは忘れよつても忘れられない。

「…………」

何か気まずい空気が充満している気がしないでもない。つーか何で俺の顔をジッと見たまま黙りこくれてんだよ。

……俺の顔に何か付いてるのか？

「おい。俺の顔に何か付いてるか？」

「…………」

黙つたままザジは首を横に小さく振つた。悪魔でも沈黙を突き通すつもりらしい。

俺はこの気まずい空気に何とか耐えて扉のすぐ側に座り、買ったパンを口に入れる。

しつかしこここまで見られてるとスゲー食いにくい。

この気まずい視線をどうにか出来ない物かね……。

あつ！ そうだ。もしかしたらコイツは昼食を食つていないのでジッと見ているのかもしれん。

そう考えた俺はおにぎり一つを手に持つてザジに差し出した。

「ほれ、腹が減つてんだつたら見てねえで言えよな

「…？」

「…………」

ん？ 少し表情が変わつたか？ ……変わつてないか。

最初は俺におにぎりを返したが、もう一回じつこへ差し出してやつた。

すると観念したのか、受け取って黙々と食べ始めた。
最初から人の好意を素直に受け取りやいいのに。

「美味しいか？ 人気商品って聞いたから買つてみたんだけどよ」「…………」

首を縦に振つたつて事は美味いってことらしい。しかしあつ少し言葉を発してほしいぜ。

まったくと言つていいほど、コミュニケーションが取れねえじゃねえか。

俺は扉の近くからザジの隣に座り直し、残つていたパンを食べる。1人で食つ時間も良かつたが、たまには2人や3人で食つてもいいかもしねりない。

「ふう～食つた食つた」

「…………」

パンを食い終わつた俺は勢いよく寝つ転がつた。これから日に当たり、空を見ながら昼寝する。まさに至福の時だ。

……おつ、ザジが急に立ち上がつたな。
教室にでも戻るのか？

「…………」

どつから取り出したのか、ナイフやボールを手に持つてお手玉みたいに投げ始めた。

おおー！ そのピエロメイクは伊達じゃないつてか。物凄く上手いんですけど。

「へへ……なかなかやるなあ」

俺が手を叩いて絶賛すると照れているのか、頬が赤い（もちろん無表情）。

意外な発見があつてなかなか面白い。普段は無表情な「イツでもちやんと照れるらしい」。

この芸が終わつた後、更に色々な芸を見せもらつた。思わず昼寝の時間を忘れるぐらいいに。

昼休みの時間の終わりを告げるチャイムが鳴ると芸は終了。俺とザジは一緒に教室に帰つた。意外な奴の意外な一面を見れたので悪くない昼休みだつた。

「フォフォ。突然呼び出してスマンの」
「何の用だよじじい。せつかく寮に帰ろつと思つたといふを呼び出しゃがつて」

今日一日の授業が終わり、俺は昼休み出来なかつた昼寝を屋上でしていた。

そして気が付いたら辺りはもう夕方。寮に帰ろつとした時、高畠から「学園長が君を呼んでいるよ」と聞かされたのでタ「よじじいの部屋に向かつた。そして今に至る。

「高畠君から昨日の君の事は聞いた。どうやらワシの取り越し苦労

だつた様じや。それと君から感じる物についてじやが……君が話そ
うと思つた時に話してくれれば良い。それまでワシ等は待つ事にす
るよ」

「そいつはありがてえこつた。俺も決心が付いたら話すよ」

俺に付けていた監視を外してくれるらしい。

やつと堅苦しい視線から解放されるのか（とは言つても数日だけだ
つたが）。

話がそれだけだつたら俺はもう寮に帰りたいんですけど。

「それでは本題に移るうかの」

「つて、おい！ 今の本題じやなかつたのかよ！？」

俺が思わず某人気漫画の嘘つき鼻長青年の様なツッコミをじじいに
してしまつた。

だつてよ、誰だつてあんな雰囲気を醸し出されたあとに本題がある
なんて思わねえだろ。

今のが確実に本題だと思ひじやねえかよ。

「君に頼みたい事があつての。その頼み事には同行者がある

じじいからの頼み事……はーい、口クな感じはしませーん。
しかも同行者付きときたもんだ。じじいめ、俺だけじや不安らし
いな。

じじいが扉の方に声を掛けると女2人が入つてきた。
えつ……？ 2人とも見覚えがめちゃくちゃあるんだが。

「あ～……よろしくな」

「ああ」

「うううううううう

じじいからの頼み事、それは俺に学園に出没する鬼（俺が前に倒した事のある怪物がそれらしい）とか学園の物が目当ての侵入者の撃退に協力して欲しいとの事だった。

高畠が昨日の俺の戦闘能力をじじいに報告し、評価しての事だろうと思つ。

最初俺は面倒だから断らうかと思ったが、報酬があると云つ事なのでやる事にした。

今日は学園近くのパトロールをすると事だ（俗に言つ警備員だな）。

しかし俺が今日聞かされた事の中で一番驚いた事と言えば

魔法か。……にわかには信じられねえな

そう、魔法についてのことだ。この学園には魔法を使う奴がかなり居て、俺のクラスにも魔法使いが居るらしい（担任を務めているネギもその一人）。

鬼を倒した事で評価され、魔法の存在を教えられた訳だが……俄かには信じられねえな。

「…………」「

最初の挨拶だけでさつきから無言で前を歩く2人。じじいから紹介された同行者で魔法の事を知っている関係者、俺のクラスに居た2人だ。

褐色肌で長瀬と同じくらいの身長、拳銃等を使う龍宮真名。神鳴流とか言う剣術を使う桜咲刹那。

学園長から頼まれてこの仕事を結構しており、長くコンビを組んでいるらしい。

そんなベストコンビの中に俺が入つていいのかよ……。
コンビ未経験者ほど、危ないものはないつてのに。

「結構いるなあ……」

パトロールを続けていたのだが、桜咲と龍宮が急に奥の林に進んでいった。

俺も後を付いて行くと、辺りから俺達を取り囲むように鬼が出てきたのだ。

数は俺が見た限りでは10体ぐらいで、大きさは俺と同じぐらい。手には鋭い爪が生えている。爪は見るからに殺傷能力が高そうだ。

「うっしー やるかー！」

「ふつ……」

「油断せず、気を付けてやつて下さいー！」

俺は仕事をする前にわざわざ寮に戻つて取つてきたサーベルを構え、正面に居る鬼に突撃した。鬼も当然鋭い爪を振りかざして向かって来るのだが、サーベルで防御。うかつに触れると、刃の高速回転に巻き込まれて、『ご自慢の爪が折れるぞ！

内心で警告した通り、鬼の『ご自慢の爪が首を立てて折れた。痛みからか、呻き声を上げる鬼だが、スキだらけのその首を俺は斬り捨てた。

鬼の首が落ち、体が消滅したと同時に首も消滅した。

「何だ。強そうかと思つたが、見かけ倒しか」

その直後に左右から鬼が俺に襲いかかってきた。その『デタラメな動きは場数を限りなくこなしてきた俺にとつて見切るのは造作も無い事。右の奴はサーベルで袈裟懸けに斬り、左の奴には一度距離を置いてから走つて飛び蹴りを顔面に喰らわした。

襲いかかってきた鬼2体は消滅、これで3体仕留めた。

「おいつ！ そつちは片づいたか？」

「ああ。3体仕留めたよ」

「私も3体倒しました」

俺が戦つている間に龍宮と桜咲の2人は鬼を3体ずつ仕留めたらし
い。
「恐山さん！ 危ない！？」
「恐山さん！ 危ない！？」
「三体ずつ？ 俺のと合わせて9体。
確かに俺が見た限り、10体ぐらいは居た筈だが……。

隠れていたらしい最後の1体の鬼が、俺が後ろを振り向いた瞬間に襲いかかってきた。

爪攻撃を俺はサーベルで再び防御。また爪が折れたスキを見て攻撃しようとしたが、発砲音と同時に鬼の手の甲に小さい穴が空いた。

どうやら少し遠くに居る龍宮が撃つたらしい。良い銃の腕前をしてやがるぜ。

腕を押されて苦しんでいる鬼を、こちらに一直線に向かつてきた桜咲が刀で腹を横に斬り裂いて倒した。

「あ～驚いた。まさか潜んでやがるとはなあ」

「どうやらもう1体もいない様だね。パトロールを続けるとしよう」

そう言つと龍宮が銃を肩に掛けていたケースにしまい、続いて桜咲も刀を鞘に収めた。

俺もサーベルをしまう鞘か何かを作ろうかな？　いつも手に持つてたんじや少し不便だし。

「さつきは助かっただぜ。ありがとうよ」

「いいえ。当然の事です」

「そうか。仕事をする仲間なんだからな」

俺が桜咲に礼を言つと、その本人は淡々として返した。

龍宮も桜咲の言葉に付け加えるように横から言つた。

実際この2人の強さもかなりの物だ。俺も戦いながら2人の戦いぶりを観察していたが、強さはその年齢にしては長瀬と同じで見事だとしか言いようがない。

まあこの2人が居てくれればかなり心強い。

「まあ頑張つて行こ」つや

俺がそう言つと一人は頷いて小さな返事を返した。

まあ昼休みに会つたザジにしても、こいつらにしても表情をあまり
変えない奴等が多い。

まあ俺も普段は仏頂面なので、人の事は言えねえな、うん。

出番い編・第5話【本を読むのは良い】とだ。眺めてるんじゃ意味ねえ】

【SHIDE・宮崎の「どか】

「んしょ……んしょ」

今私は図書館島に持つてていく本を運んでいます。
すぐ後ろには私が所属している『図書館探検部』のメンバーの夕映、
ハルナ、木乃香さんが運ぶのを手伝ってくれています。

「のどかー！ 前に気を付けるですよー！」

うん、分かつてると夕映。

前に私は本を運びながら階段を下りようとしとしたしたんですが、躓いて階段から落ちてしまつたんです。

でも……私のクラスの担任のネギ先生が助けてくれたんです。おかげで私にケガはありませんでした。

でも、あの時みたいなドジをしない為にも田の前にある階段を慎重に下りていきたいと思います！

「あつ……」

私が心中で決心したのも束の間でした。

突然強い風が吹いて私はバランスを崩し、持っていた本もろとも階段から落ちてしまいました。

あうう……またやつちやつた……。

「のびがーー！」

私を呼ぶ声が聞こえます。前に助けてくれたネギ先生は来る途中、職員室に居たのでここに居る訳がありません。
私は今回……助からないみたいですね……。

「助けて……いやあーーー！」

叫び声を上げても誰も助けに来れるわけがありません。
私はドンドンと地面に向けて落ちていきました。
これから来るであろう、激しい痛みに怯えながら、私は目を瞑りました。

「あふうべー？！？」

あれ？ 痛みが全然ありません。

普通落ちたらそれなりに痛みがある筈なのに……。

それに変な声が聞こえたような……あつ！

「な、何なんだ一体～……」

下から声が聞こえ、下の方を見てみると私が落ちたのは地面ではありませんでした。

その正体は最近私達のクラスに来た少し怖そうな感じが印象的な、新しいクラスメイトの恐山さんでした。

【SHIDE・俺】

退屈な授業が終わり、暇だつた俺は適当に学園を歩き回つて。いた。適當な場所で歩くのを止め、一休みをしようと、俺は辺りを見わたしてみた。

すると階段近くに「度いい日陰場所を見つたので、俺はすぐさまその場所に向かい、大の字で寝こんだ。

「あ～……せっぽいなあ。」いつう場所は

リラックスマード全開の俺はすぐ近くに生えている木々が風になびく音を聞きながら目を瞑つた。

気持ちいいなあ、ここも屋上と同じくらいのんびり出来る場所だぜ。俺の寝テリトリーに加えておこうかな……。

「助けて……いやあーー！」

あつ！ いけね。何気なく目を瞑つていたら寝ちましたぜ。でもまだ少し眠い……目がシパシパする。

それよりもさつき悲鳴が聞こえた様な気がしたが……気のせいが？

ん？ 何かが落ちてくるぞ。何だ……？

「あふろべー？！？」

グアアア……不意打ち攻撃かよ。何かと思つたら人が落ちてきやがつた。

腹に直撃を受けた俺はカエルが潰れたような悲鳴を上げ、眠気が一気に覚めた。

「な、何なんだ一体……」

「あっ！」「ゴメンなさい！？ 大丈夫ですか！？

謝るより先に俺の腹の上から退いてくれねえかな？

俺がそれを指摘すると落ちてきた奴は顔を真つ赤にしながら慌てて退き、改めて謝つた。

コイツは確かに俺のクラスにいる富崎とか言つ奴じやなかつたか？

俺つて何故かクラスでコイツに異様に避けられてんだよな。

聞いたところによると、何でも“だんせーきょうふしじゅ”とか言う奴らしい。

要するに男が怖いって事だが、何故に担任のネギは怖がらないんだ？

「え、えっと……じゃあ私はこれで」「

「おいおい、待てよ。ここら辺に落ちてる本は全部お前のじやねえのか？」

「あつ……！ 本、本……」

そんなに俺から逃げようとしたくなくともいいんじゃないでしょうか？

露骨にそんな態度を取られると、俺も少し傷付くんですが……。

よし！ ならイメージ回復作戦に本を集めるのを手伝つてやるか。

俺が素早く自分の周りにある本を集め、宮崎に手渡していく。
やがて落ちている本を全部集め終わつたのだが……。

「……少し持つてやううか?」
「あうう……すいません」

身体があまり大きくないくせに大量の本を一度に持とうとするんじ
やねえよ。

俺は比較的大型の本を宮崎から全部受け取り、両脇に抱えた。
宮崎が持つている残りの本は、漫画本のようなサイズの本が数冊だ。

「のじかー!! 大丈夫ですかー!!」
「もう! 心配させないでよ!!」
「ウチ、大怪我負つたと思ってハラハラしたえ」
「う、うん。心配掛けてゴメンね」

階段から次々と本を持ちながら走つてくる奴等が3人居た。全員知
つた顔だ。

綾瀬夕映、早乙女ハルナ、あのタコの末裔みたいなじじいの孫娘だ
と言う、近衛木乃香。

宮崎が事情を全員に説明し、俺は礼を言われた。別にたいしたこと
じゃねえんだが。

「恐山君で、教室じや普段仏頂面で愛想が無いのに、やる時はやる
のね。このこの」
「何をにやけた顔してんだよ。気持ち悪いな」
「あ~それ、女の子に言つ言葉じゃないよ」

早乙女が肘で俺を突きながら文句を言つてきた。

言っている意味がよく解らんし、愛想がねえのは余計なお世話だ。
元々俺はこんななんです。

「こいつ等から話を聞いてみると図書館島つて所に本を運びに行く途中だつたらしい。

丁度いい、図書館島とやらには行つた事がねえし、本運びのついでに案内してもらひうか。

「その本はそつちにお願いするです」

「ここの本は向こうの棚にお願いな」

「恐山く～ん！ ちょっと手伝つて～」

「あ、あの、えっと……これをお願いします」

図書館島の中はやたら広かつた。一体どれだけの本を詰め込んでんだよ。

綾瀬の話によると地下室も相当の数があるらしく、期末試験でネギと一緒に訪れた事があるらしい。

俺はゆっくり見て回ろうかと思ったが……他の奴等は人使いが荒いつたらねえ。

クラスでは大人しい近衛や宮崎も意外と人使いが荒かつた事に少しショックだった。

綾瀬や早乙女は正直予想通りだったが。

「これで終わりだな。ハア～」

「お疲れ様、恐山君」

一休みと本棚にもたれ掛かっていた俺に近衛がハンカチで汗を拭いてくれた。

あ～やつぱり近衛は優しい奴だ。

それから続いて綾瀬が「お疲れ様です。どうぞ」と言つて既にストローが刺さつている飲み物を渡してくれた。

それを貰い、遠慮無く飲み干す俺だが、飲んだ瞬間に口から勢いよく噴出してしまった。

その飲み物は……抹茶バナナとか言つぶさけた名前だった。

「犬の本……か？」

「ええ。なかなか感動する本ですよ」

本の整理を手伝ってくれたお礼にと俺は図書館島を案内してもらつていて（とは言つても一般生徒が入れるギリギリの所までらしいが）。俺が本棚から本を取つて見ていく度に詳しく解説してくれるので、本にかなり疎い俺には結構ありがたい。

「これは何だ？ 女が活躍する本か？」

「あはは、良いの見つけたな。ウチ、その本大好きなんよ」

「あ～それね、私も読んだ事ある」

この『図書館探検部』なるメンバーが口を揃えて面白こといつのだから面白いんだろうな。

……後でコソソリ借りて読んでみるか？ 僕も本 자체に興味がないと言つ訳じゃない。

俺がガキの頃読んでいた本と言えば……戦術マニュアルが多かつたつけ。

「向こうの方の本棚はどんな本があるんだ？」

「向こうはですね……辞書とか、辞典とかですね」

しかし本当にこの図書館はとにかく本に溢れているな。
参考書や教科書、辞典、童話、漫画、何でも揃っている。
そういうえばじじいが本日当てに学園に侵入してくる輩もいるって言つてた気もある。

貴重な本もあるのか？ 見た限りでは無いが、地下室とやらにいるのかもしねえ。

「じゃあ俺は先に帰るからな。お前等気をつけ寮に帰れよ

結局俺は口が沈むまで図書館を見学した。

あこつ等はまだ調べ物があると図書館に残るひしこ。

「あ、さよなら」

「じゃあね~」

「心配してくれてありがとな~恩山君」

「バイバイです」

全員でテンポ良く別れの挨拶をしてくれたことにさすと感動する俺。

まあ今回の件で高崎が普段感じている俺のイメージが改善されればいいなあ。

ちなみに『女が活躍する本』は秘密でコツソリと借りた。寮に帰つたら早速読んでみよ。

出合い編・第6話【機械にも、動物を愛する心はある】

【SIDE・俺】

「恐山さん」

「ん？ ネギか」

四時間目の中止が終わり、昼食を買ひに行こうと教室を出た俺はネギに呼び止められた。

ネギの授業はかなり解りやすい。そこら辺の英語教師より教えるのが上手いのではないだろうか、と俺は思つ。

しかし、欠点は授業時間がたまに短くなる事だな。

授業中にも関わらず、委員長の雪広と神楽坂がケンカを始めやがるんだ。

しかも周りの奴等がどちらが勝つか賭けをするから、止める奴は誰もいない。

……俺が見かねて止めに入った事があつたが、逆に俺がキレて皆に止められたんだよなあ。

「どうですか？ 編入して少し経ちますけど、クラスには慣れましたか？」

「まあ、大体の奴等とは結構話してゐしな。慣れたと言えば慣れたぜ」

ここに来てからかなりの日にちが経つた。

近い日にクラスメイト全員で行く修学旅行とやらがあるらしい。

その日までにはクラスに慣れておくと言つ課題は果たした。

修学旅行ねえ……何処に行くんだろうか。

「それは良かつたです。担任として安心しました」「おう。気に掛けてくれてありがとな」

ネギは生徒一人一人を気に掛け、心配している。とても10歳の子供とは思えねえよ。だからクラスの奴等の多くから、子供ながらも慕われているんだろうな。

「はい。それでは」と言つて笑顔を見せながら走つていくネギ。お前も頑張り過ぎて無理するなよ。

「さつてと、昼食を買いに行くか」

昼食を買いに来たのは良いが、かなりの人数だな。どこに並んでも時間が掛かりそうだ。どつか適当な場所に座りこんで、人数が少なくなるのを待つとするか。

えへつと、何処か適当な場所は……。

「やや、剣山殿では「ざりんか」

「何してるアルか」

「あつ？ 長瀬と古菲か」

俺が座る場所を探していると、最初に会つたばかりの俺を助けてくれた長瀬と、その友達である古菲がやつて來た。

手には昼食と思わしき物を持っていた。……美味そだなそれ。

「おい、手に持つてんのは何だ？」

「これで「ざるか？ 肉まんで「ざるよ」

「超包子の奴だから、とても美味しいネ」

超包子ってえと、あのかなりの行列が出来てゐる所か。その周りに置いてある椅子にも人がいつぱい居る。

余程の人気商品らしいな、そのにくまんと言つ食ひ物は。

近くに寄つてみればかなり良い匂いがする。

今までここで昼食を買わなかつたとは……ちょいと不覚だつたな。

「ふふ、一つ「ざるか？ 見るからにお腹が空いてる様子で「ざるし」

「マジか！ 本当に良いのか？」

「構わないで「ざるよ。ニンニン」

やつぱり長瀬は良い奴だなあ。俺は肉まんを受け取るとすぐに一口食べてみた。

「美味しい！ 激美味い！！ ヤバ美味い！！！」

人間つてこんな美味しい物を食べてるのかよ。スゲー羨ましいぞコノヤロー！！

……つて俺も今は人間だつたな。

すぐに肉まんを食べ終わった俺の感想はただ満足、満足の一言です。

「相変わらずの食べっぷりで」
「前にも言つたろ？ これが俺の食べ方なんだよ」

自身も肉まんを食べながら感心した様に言つ長瀬。

戦士として、戦いの時は手短に食事を済ませるのは鉄則だ。
長瀬の横をチラツと見てみると口こいつぱいに肉まんを頬張つてている
古菲の姿があつた。

言つちや悪いから心の中で留めておくが、かなりの間抜け顔だぞお
前。

「つつのわふれたあふが」
「汚えぞ。飲み込んでから喋れ」

そんなに沢山肉まんを頬張るからだよ。

喋るなら飲み込んでからだぞ。そつそつ、慌てずにゆっくり飲み込
め。

よし、飲み込んだな？ さあ、何が言いたかったんだ？

「言つたの忘れたアルが、前回の勝負は正直俺にとつて最悪な記憶でしかなか
つた。

今度再戦を申し込むアル」

「あれはお前が勝手に襲撃したんだろうが！！」

古菲が言つ『前回の勝負』は正直俺にとつて最悪な記憶でしかなか
つた。

数日前、俺がボーッとして廊下を歩いていると突然古菲が「私と勝
負アル！..」と言つながら腹に拳打を叩き込んだのだ。

油断しきっていた俺はその場で昏倒、気が付いた時は保健室のベッドの上だった。

介抱してくれていた保健委員の和泉の話によると、ネギがここまで運んでもくれたらしい。

そのすぐ後から聞いた話だが、俺を昏倒させた直後に古菲はその場から慌てて逃げたらしい。物凄く質の悪い通り魔か、己は…！

「そ、それは……剣山がかなりの使い手って聞いたアルから。あれぐらーの奇襲は察知出来ると思つてやつてみたアルよ」

何だそりや。俺は誰がそんな話をしたのか問い合わせただそう思つたが、犯人はすぐに解つた。

さつきから俺と田を合わせようとせず、汗ダラダラで古菲の隣にいる長身の女。

犯人はお前か！ 長瀬！！

「そ、それでは拙者はこれにて失礼するでござるよ」

あつ！？ 逃げやがった！！
おのれ、逃げ足の速い。

「楓、待つアルよ」

楓が逃げ、古菲もその後を追つていった。
だが、追う前にスゲー嫌な事を言い残していきやがった。

「再戦の事、約束したアルよ」

勝手に挑んでおきながら勝手に約束していきやがった。

……まあいい。女だろうが、男だろうが、この剣山が全身全靈を持つて叩き潰す。

おっ！ バカやつてる間に超包子の行列が少なくなつたな。
よし、並ぶとするか。

午後の面倒な授業も終わり、後は寮に帰るだけ。

俺はゆっくり寮に帰ろうと歩いていたが、ある物が目に飛び込んできた。

「あの時の子猫か……」「

それは黒い1匹の子猫。屋上で少しだけ遊んでやつた子猫だった。誰が見ても「可愛い」と答えるその姿は俺から見ても可愛らしいと言える。

あれ？俺つてこんなに可愛い物好きだつたか？ここに来てから急に可愛い物好きに目覚めたような……気のせいだろうか。

その子猫はジッと見ていた俺の姿に気が付いたのか、俺の方に近づいてきた。

「お前、俺の事覚えてんのか?」

近づいてきた子猫を俺は抱き上げてやると嬉しそうに鳴いた。

屋上で遊んだ時から気になつてはいたが、親とか飼い主はいないのだろうか。

首を見てみると首輪は無い。親が死んでしまったのか、それともこんな小さいに捨てられてしまったのか。

どうせこじても1匹まつちには変わりはない。

「ダーラー……そつか。お前は1匹まつちなのか」

かなり不憫な奴だな。明日授業サボつて飼い主でも探してやるうか。そんな事を思つてると後ろから誰かが来る気配を感じ、俺は振り向いた。

「あ……」

「恐山さん」

見るからに口ボットな3・A生徒の絡繆だった。

俺だった事に驚いたのか、絡繆は固まつたままだ。

俺が首を傾げていると視線がチョロチョロ俺が抱いている子猫に行つている。

もしかしてお前が飼い主なのか？

「お前の子猫？」

「あ……いいえ、違います。いつもこりらこりる猫達に上サをあげているのですが、猫の数が合わなかつたので……」

「探してたつてわけか。それで？　コイツはお前の探してた猫なのか？」

俺の問いに絡繩は「クン」と小さく頷いた。

普段教室では無口な奴だが、優しい所あるじゃねえか。

俺は子猫を絡繩に渡した。が、子猫がウルウルした目で俺を見てきた。

おいおい、そんな目で俺を見ないでくれよ……。

「恐山さんに懷いてるようですね」

「そうみたいだ。1回屋上で遊んでやつただけだつての」「元

じこまであからさまに懷かれては、無下には出来ない。

俺は絡繩に付いて行つて、コイツと他の猫達にエサをあげる事にした。

エサをあげ終わると猫達は去つていつたが、どうしてかこの黒い子猫だけは離れようとしない。

絡繩の話によるとこの子猫はダンボールに入れられ、道端に捨てられていたらしい。

その時はかなり弱つていたが、一生懸命に世話をしたおかげで今の元気な姿があるそうだ。

命を大切にする心があるなら、ロボットだとしても、絡繩は充分に人間だな。

「ふうん……明日俺がコイツの飼い主を探しに行つてやるかなあ」

俺が吹くと絡繩は心底驚いた様な顔になつた。

……俺がこんなことを言うのが、そんなに意外ですか？

「あの……それでしたら私もお手伝いさせて下さい。恐山さんだけにそんな事をさせる訳にはいきませんから」

何だそんな事かよ。まあ手伝ってくれるならかなり助かる。

本来飼い主が見つかって一番喜ぶのは今まで世話をしてきた絡繩の方だからな。

こうして俺と絡繩は明日の放課後に子猫の飼い主を探しに行く事になつた。

出番い編・第7話【ペットを飼つたのは、大変だな】

【SHIDE・絡繆茶々丸】

今日の授業が終わり、放課後になりました。

生徒のほとんどが部活に行き、部活をしていない生徒はそのまま寮に帰つてきます。

私はいつも通りマスターと共に、学園長先生が用意してくれたマスター専用の家に帰宅するのですが、今日はちよつと違つています。

昨日、恐山さんと子猫を飼つてくれる人を探しに行くと囁つ約束をしたのです。

「茶々丸、行くぞ」

「あつ……すいませんマスター。今日はちよつと用事が……」

「ん? 何だ?」

そういえばマスターに昨日の事を伝えるのを忘れていました。

私はすぐに誤り、今日の約束の事を話しました。

するとマスターの顔が徐々に強張つていきました。

どうかしたのでしょうか? マスター。

「そうか。あいつと……解つた」

「あつ……マスター」

そつとマスターは教室を出て行きました。
もしかして機嫌を悪くされたのでしょうか……。

「おい、話は終わったのか？」

一応マスターの了解は取りました。話が終わるまで待つてくれた恐山さんにその事を伝えると「じゃあ行こうぜ」と言って、私の手を引きました。

……まだ教室に残っている人の視線が集中してなんだか気まずいです。

【SHIDE・エヴァンジエリン】

茶々丸があいつ、恐山と一緒に子猫の飼い主を探しに行くらしい。じじいから聞いてはいたが、奴からは確かに異様な力を感じた。だが、その異様な力は悪魔でもなく、妖怪等の類でもなく、私と同じ吸血鬼でもない。

「しかしなあ……」

じじいやタカラミチは奴を危険人物ではないと判断した様だが、実際はどうなのだろうか。

私も普段の奴の行動には目を光らせてはいるが、特に怪しい行動は見あたらない。

まあ普段の行動が能天氣だし、余計な心配は無用か？

「ふふ。奴とは一度詳しく述べてみたいな」

じじこは恐山が自ら話すのを待つと言つたが、私はそれまでは待つほど気が長くはない。

奴からじつへり、ジワジワと話を出してみたいな、フフフ。

【SHDE・俺】

「……何か背筋に物凄い寒気がする。
誰かが俺の事を狙つてやがるのか？」

「どうかしましたか？ 恐山さん」

「……いいや、何でもないぜ」

子猫を抱きつつ心配そうに俺の顔を見てくる絡繆。

俺の事より、早くコイツを飼ってくれる奴を見つけねえとダメだろ。

「じこから探す？ デタラメに探しても効果的じゃねえだろ」「そうですね……まずは近くにある住宅街から聞いてみてはどうですか？」

タ「じじいから貰つておいた地図を絡繆が広げ、言つた場所を確認する。

比較的近くにあるもんだなあ、住宅街つてのは。

「すぐに見つかるといいな」

「……そうですね」

【ニヤア～】

〔住人A〕

「1匹ぼっちゃんなんだよ。もし良ければ飼つてやつてほしいんだが……」

「ゴメンなさい。うちの家にはもう犬がいるのよ」

…

〔住人B〕

「あの……」の子を飼つてはいただけませんか？」

「悪いな。俺、猫アレルギーなんだ」

〔住人C〕

【ニヤア～】

「私、動物嫌いなのよ」

「ですか……」

結果は惨敗。住宅街をこれでもかと言つぐらに訪ねてみたが、誰も飼ってくれる人はいなかつた。

つたく、心が狭い奴等だ。

アレルギーや動物嫌いなんざ根性で克服しろつてんだ。

「気付けば、あつという間に暗くなつちまつたな

「……どうしましようか

気が付けばもう夜だ。途中で猫達にエサをやつしてたりした時はまだ明るかつたのに。

絡繩が抱いている子猫は腹がいっぱいで疲れたのか分からないうが、グッスリ寝ている。

「これ以上動かすのは可哀想だ。諦めよつぜ

「……仕方ないですな

むむ……絡繩の顔がスゲー落ち込んでる様に見える。
なんか期待に応えられなくて悪い気がするなあ。

……しそうがねえ。昨日考えてた事だが、実行に移すか。

「仕方ない。俺が飼うよ、その子猫

「……ツ！ 良い……のですか？」

「ああ。昨日聞いてみたが、寮に許可取れば良いみたいだ。ネギも動物を飼つてるみたいだし

「動物を飼つてるみたいだし

俺は昨日の夜に万が一の事を考えて動物を飼つて良いか寮に面する連中に聞いておいたのだ。

答えはOK。自分が責任を持つて飼えれば良いそりだ。

「なんだかんだ言つても俺に一番壊いてるからな。『マイシは

【ニヤア～】

絡繩から子猫を受け取ると子猫は嬉しそうに俺の顔を舐めた。くすぐつたいから舐めるのを止めや。

「あの……もし良かつたら私とマスターの家に来ませんか？ その子猫が普段食べているキャットフードの買い溜めがありますので…」

…

絡繩からの嬉しい申し出だ。俺も動物を飼うのは言わずもがな、初めてだ。

普段猫達と触れ合っている絡繩から、育て方等の方法を色々と聞けるかもしれません。

もちろん俺は絡繩の申し出を受け、家に向かった。

「なんと言つか……珍しい家だな」
「どうぞ、中にお入り下さい」

着いてみるとそこには木で出来た家があった。

巨大台風とか来たら一発で吹き飛ばされそうな気がする。
絡繹に言わて家中に入つてみると、そこにはしかめつ面のエヴァンジエリンの姿があつた。

「ずいぶん遅かつたな……つて何でお前がここにいるんだー?」

エヴァンジエリンが俺に向かつて指を指した。

何でそんなに不機嫌なんだよ。子猫が怯えるだらうが。

「私が招待しました。子猫にあげるキャットフードを渡そつと思いまして」

「む……そうか。それなら仕方ないな」

俺は絡繹が出してきたキャットフードを受け取り、1日にあげる量等を聞いた。

そして気を付ける事、しつけの事等も一応聞いておいた。

全ては絡繹が本から得た知識らしい。

「ダーダー、じゃあ俺は帰るわ」

「はー。気をつけてお帰りください」

「ちょっと待て」

目的の物を受け取り、聞いておきたい事も聞いたので俺は寮に帰ろうとしたが、エヴァンジエリンに呼び止められた。何だか不安な笑みを浮かべている。

なんだよ、その笑いは……。

「今度の休み、お前と話したい事がある。用事も何も無い暇な日に
しておけよ。茶々丸が呼びに行くからな」

「へイへイ。了解」

「あの……今日は本当にありがとうございました。恐山さん」

俺は絡繆に「おう」と返事を返して家を後にした。

絡繆の顔が若干赤かったな、どつかの回路がオーバーヒートでも起
こしたのだろうか。

それにもしてもエヴァンジエルのあの笑み、背筋の寒氣の正体はも
しかしたらあいつかもしれん。

何かとんでもない約束を取り付けてしまつた様な気がするぜ。

「わう言えばコイツにまだ名前を付けてなかつたな

寮に帰つた俺は、持ち帰つた子猫を毛布の上に優しく寝かせてやつ
た。

さつきまで起きていたが、またすぐに寝むつてしまつた。

子猫つてのはみんなこうなのが分からぬが、可愛い寝顔をしてや
がる。

「お前の名前は……」

「言つておぐが、安易な名前じゃない。」

くれぐれも誤解すんな。

「ジャガー。お前の名前はジャガーに決めた」

思わぬ同居人が増えたが、悪い気分はしねえ。
せいぜい、俺の家のマスコットとして、元気に育てよ。

出番い編・第8話【俺と同じ奴って……女ー?】

【SHIDE・俺】

今日は1日休日だ。

タコじーさんから頼まれ事も無く、平和な1日を過ごさうと俺は思つた。

だが

「エヴァンジエリンとの約束があつたんだよなあ

そつ、前にエヴァンジエリンが俺とじつくり話したいからと言ひ事で、無理矢理約束を取り付けたのである（無論、返事をした俺にも落ち度があるにはあるが……）。

朝食を食べた後、俺は飼い始めた黒猫のジャガーと共に何所かへバッくれようと思つた。

しかし、時既に遅し。本人から「丁寧にも、電話が掛かってきやがつた。

「逃げるなよ。今日はお前と話したい事があるからな」

家に来て良い時間になつたら絡繩が呼びに来るらしい。一方的にそういう言つと電話を切つてしまつた。

無機な音を鳴らす受話器相手に何回か俺は怒鳴つたが、切れているのだから相手に聞こえる訳がない。俺は諦めて絡繩が呼びに来るまでのんびり部屋で過ごす事にした。

「 ッ！？ 「

1時間ぐらいジャガードボールで遊んでいた時だった。突然俺の頭に襲ってきた痛みに、俺の体が震えた。

この痛みは……感覚は……。

「間違いねえ……俺と同じ、TFだ」

ジャガードを買っておいた小さな小屋に入れ、俺は部屋を飛び出した。自分と同じみたいだが、不安定な感じもするこの感覚を頼りに、俺は走った。

寮を出てすぐだったが、俺を呼びに来たのだろう、絡繆の姿があった。

「恐山さん？ どうか、されたのですか？」
「悪い、急いでんだ。話してる暇はねえ！」

絡繆の横を通り、俺は走った。……少し対応が冷たかったか？ だが、今はそんな事を気にしている場合じゃねえ。俺と同じ奴がここに来ているんだ。

感覚を頼りに寮から走っていた俺は、麻帆良学園の方まで来ていました。段々と強くなるこの痛みに俺は内心で確信した。

間違いない……近くにいる。

俺は辺りを歩き回り、正体を探し回った。

すると突然痛みが無くなり、感覚が無くなってしまった。

「ちつ、まいったな。……とりあえずもう少し調べてみるか。この近くに居る事は確かなんだし」

俺が辺りを調べ回っていると、変な格好をした5人の男集団に顔見知りが囮まれていた。

顔見知りの連中全員は、恐怖に引きつっている表情をしていました。

それは、集団の一人が刃物をチラつかせているせいだ。

それを見た俺は当然の如く、助ける事にした。

「おい、何やつてんだ？　お前等」

「あつ！　恐山君！！」

「た、助けてくれる……？」

囮まれていたのは、俺のクラスでかなりの仲良しグループである『

運動部4人組』だった。

そういうえば「トイツ等とはあまり話した事がない。話した事と言えば、宿題の事や、初めて俺がクラスに来た時に質問をしてきた程度だ。

「あ～ん？ お前誰だよ？」
「彼女達は俺達が今遊びに誘つてんだ。邪魔しないで向こうに行くなっ？」

囲んでいたヤロウ集団の2人が俺の前に来てガンを飛ばしてきやがつた。

しかも一人は俺の肩に手を置いてやがる。……ぶつ飛ばすか？
いやいや、まずはサイバトロン流で解決してみるか。話し合いで。

「そう言つ訳にはいかねえ。そいつ等は俺のクラスメイトなんだ。
テメエ等が向こう行け」

「ほお～……何だとコラフア～～！」

肩に手を置いてた奴が肩から手を離したかと思つとこきなり殴りかかってきたが、当然避けた。

向こうから先に手を出してきたので俺は手早く反撃を開始。
殴ってきた奴の手を掴んで、思いきり背負い投げをかましてやつた。
まず一人。

「て、てめえ……」
「やつちまえーーー！」

残りの4人がナイフを取り出して俺を一斉に取り囲んだ。
でもこんな状況を乗りきるのは、修羅場をいくつも乗り越えてきた俺にとつて造作も無い事だ。

俺は狙いを定めた1人の懷に素早く入り込んで当て身を喰らわし、

昏倒させた。

これで2人目。

激怒した2人が俺の後ろからナイフで斬りつけてきたが、冷静に対処。避けた瞬間に肘打ちを鳩尾に叩き込み、倒した。これで一気に4人だ。

「後はお前一人だけど、どうすんだ?」

「ヒ、ヒイ……ば、化け物だ……」

残りの1人がナイフを落とし、腰を抜かして俺から後退つていく。情けねえ姿ぜ、男として恥ずかしくはないのだろうか。

俺は後退つていく奴にゅつくり近づき、胸ぐらを掴んで立たせた。

「コイツ等にまた手を出してみろ。その時は、全員容赦なく病院送りにしてやるぞ」

「ヒイー！？！？　すいませんでしたー！？！？」

泣きながら立ち上がり、仲間を捨てて走り去つていく。

俺はあんな男として情けない奴が一番嫌いだ。

みつともなくて、見ていると腹の底からムカついてくる。

「恐山君強ーい！！」

「うんうん。全員ナイフを持つてたのに、あつという間に倒しちゃつたね」

呆然と見ていた4人組が俺の元に来るなり絶賛。

明石や佐々木なんかはしゃぎまくつてるし、和泉と大河内はかなり

感心した様子だった。

「まあ、あんな奴等は雑魚だからな。俺にとっちゃや樂勝……ん？」

4人組が困まれていた方を見るともう一人、女がいた。
近づいて見てみると髪の毛が白く、目の色は赤、真っ白な服を着ていた。

あのおバカ集団を相手にするのに夢中で、全然気付かなかつたな。
「そうそう！　この子がさっきの男達に絡まれててさ。助けようと
思つたら私達も絡まれちゃって」

明石がその時の状況を詳しく俺に話してくれた。
改めてこの女をよく見てみると、奇妙な格好をしている。
力も霸氣も感じられない。今にでもこの場から消えてしまいそうだ
ぜ。

「おいお前。名前は何て言つんだ？」

俺が代表して名前を聞いてみると、白い女は困ったような顔を浮かべた。

名前を聞かれるのがそんなにまずいのだろうか？

俺がそう思つてると白い女は、ボソボソと口を開いた。

「…………トランス…………ミュー…………テイト…………」

「…………！」

「えつ？　今何て言つたの？」

俺はいつももなく驚いて、その場に固まってしまった。

だつて名前からして限りなくTFだし、無くなつていた頭の痛みが、また出てきた。

近くに寄つてみると分かるが、何か物凄く不安定な力だ（無論、俺にしか解らない）。

暴走とかはしないのだろうか？

「恐山君、この子の名前は何て言つの？ 私達聞こえなかつたんだけど……」

「あッ！？ えーと……」

「まずい、まずい、まずい……非常にまずい。」

どうすればいいんだ俺。今から人間の名前なんて考えつく筈もない。神様、居るのなら、どうか俺に考える時間をください。

いや、ホントに。

「どうしたん？ 顔が真っ青や」

「具合でも悪いの？」

ええ、ある意味具合が悪いです。この状況が俺にとつては具合が悪いです。

トランスマリーと名乗つたコイツは未だに俺の事を穴が空くほど見ているし、後ろの四人組も名前を聞きたくてウズウズしてゐる感じだし……。

とりあえず俺はこの場の状況を何とかするため、最適な行動を取る事にした。

「都合が悪い時は、逃げるに限る！」

「きよ、恐山君！？」

俺はトランス（以下省略）を脇に抱え、その場から逃げた。

「こういう状況は慣れてねえ……。」

「ああ、あいつ等の声が聞こえやがる。」

頼むから大人しく俺を撤退させてくれ。」

「訳は今度話す…… すまねえ……！」

「訳つて…… ちょっと…… 恐山君……！」

「くわ～…… 傍から見たら誘拐かもしれねえが、俺はそんなつもりはないぞ……！」

「この場にコイツを置いていったら何かやばくなつだからだ……！」

「……ここまでくれば大丈夫だ」

「どれくらい走ったか解らねえが、俺つて今日は走りっぱなしじゃねえ？」

脇に抱えたトランスを離し、俺は座りこんだ。その隣にゅつくりと、トランスが座り込んだ。

「お前もトランスフォーマーだろ？ お前も俺と同じ1回死んだのか？」

「トランス…… フォーマー…… 死ぬの…… 痛い」

「コイツ、まだ生きてる時にどつかの回路か何かが壊れたのかかもしれない。

それとも元からこんな不自由なのだろうか……。

まあ、何にしてもコイツは1回死んだ事に変わりはない。

「ランページ……シルバー……ボルト……友達……私の……友達」「友達？」

ランページ……か。確かに俺が死ぬ前に1回戦った事のある力二野郎だ。

シルバー・ボルトはあのデスマス野郎の事だろう。じゃあコイツはサイバトロンなのかデストロンなのか、分からくな。

「本当にお前は何なんだ？」

「それは私が聞きたいな。じっくりと」

ん？ 今何処からか声が……それもスゲー聞き覚えがあるこの声は……。

俺は漫画よりしき、音が鳴りそつなくらいにゆづくじと首を後ろに振り向いた。

「女を連れ回して良い身分だな。私との約束を忘れて……」

「……」

ああああああああああ……鬼が、エヴァンジエリンと絡繰が居た。揺らめく巨大な炎をバックに怒っている。

隣の絡繰も無表情だが、何故か怒氣を感じさせるのは氣のせいだろうか。

「ま、待て。その様子だと微塵も聞いてくれないかもしけんが、俺の話を……」

「黙れ」

「はい……」

結局俺は絡繩に引きずられながら連行された。エヴァンジーリンと絡繩は俺が「痛え痛え！」と言んでも聞いてくれなかつた。怒つてうらつしゃる……2人が怒つてうらつしゃる。

ちなみにその後をトランスが必死に付いてきた。お、俺つてどうなるんだ？

出会い編・第9話【また同居人が増えましたよ?】

【SIDE・俺】

目覚まし時計の音が鳴り、俺は目を覚ました。

時刻は6時、そして未だに鳴り続いている目覚まし時計のスイッチを乱暴に叩いて止めた。

大きな欠伸をかまし、カーテンを開けると雲一つ無い晴天が広がっていた。

俺つてこいつ、氣持ちの良い朝つて好きだなあ。

【ニヤア～】

「お前も起きたか。待つて、飯にすっからな」

俺にすり寄ってきた愛猫のジャガーの頭を軽く撫で、俺はキャットフードの缶を開ける。

容器に入れてあげると本当にコイツは美味しそうに食べるので。眺めてる俺も釣られて徐々に腹が減つてくる。

「さつてと、朝食を作るとするか」

俺は台所に行き、いつもの簡単な朝食を作り始める。

いつもなら1人分で足りるが、今回は深い深い事情があつて朝食を2人分作らねばならない。

その理由は俺の目線の先にあるソファーの上に居る奴だ。

「つたく、気持ちよさそうに寝てやがる。俺の気も知らねえでよ

ソファーで毛布を被つて未だに寝ている少女。俺の部屋に住む事になつた新しい同居人だ。

元TFで名はトランスミュー・テイト。今は人間の姿なので名はミュウ（俺が名付け親）。

「タコ・じじいに色々と事情を話さねえとな

そもそもこいつなつたのはさつきも言つた深い事情があつての事だ。決して俺はこいつなる事を望んでいた訳じゃない。これは誓つて本當だ。

昨日俺はエヴァンジエリンと絡繰に無理矢理連行された後、質問と言つ名の尋問を受けたのだ。内容は俺から感じる力の正体、ミュウの正体、ミコウとの関係だった。もちろん俺はこんな質問に答える気は無いので色々と言いくるめたりして誤魔化した。

この対応にかなりの不満を感じたのか、エヴァンジエリンはかなりご立腹だった。

なんとか宥めようとした俺は「言つ事何でも一つだけ聞いてやるよ」と言つた。

するとエヴァンジエリンの顔がまるまる笑顔に変わったのは今でも忘れられない。

ああ……何であんな事を俺は言つてしまつたのだ？

＜回想＞

「本当に何でも話つ事を聞くのだな？」

「ああ、男に一言はねえ！」

「フフフ……じゃあお前の血を吸わせてもらおうか」

「…………ダ－？ 何言つてんだ？」

「じじいから聞いてなかつたのか？ 私は真祖の吸血鬼であり、魔法使いなんだぞ」

「ダ－！？ お前がネギと同じ魔法使い！？ 確かに俺のクラスにはネギ以外にも魔法使いがいるつて聞いてたが…………そ、それに吸血鬼だなんて初耳だぞ！ じいさんからは何も聞いてないぞ！！」

「じちや じちや じつるわい。さて、血を吸わせてもらひや」

「ちょっと待て…？ まだ心の準備が……」

「ええい、じちや じちや じつるわい。茶々丸、押されん」

「イエス、マスター。すいません、恐山さん」

「ちよ、待て待て……ダ－！？！？」

「回想終了」

「変な感じだつたよなあ。血を吸われるつて」

血を吸血鬼に吸われるなんて、生まれて初めての体験だつた。

エヴァンジロリンは首筋に噛みついたかつた様だが、俺が抵抗したために腕に変更。

噛みつかれた時に少しの痛みが走つただけで後はなんどもない。

吸われている時はなんだか蚊に食われているような、注射器で血を吸い取られているような感じに似ていた。

吸い終わった後、エヴァンジエリンが「身体中に力が溢れてくる」とか言って、軽快に動き回つてやがったな。そんなに俺の血が美味かったのだろうか？

「それにしても意外だな。あんな怖い奴が、ネギの親父に負けたせいじでここにいるなんて」

エヴァンジエリンは昔、ネギの親父に掛けられた呪い……なんつたつけ？

登校……登校……おお、そうだ！！『登校地獄』だ。その呪いのせいでの魔力を封じられ、学園の外にも出る事が出来ないので15年間も学園で勉強をさせられているらしい。

15年間も勉強してるだなんて不憫すぎる。俺なら絶対に耐えられそうにない。

それにしてもネギの親父もなかなかエグい事をしやがるぜ。なんせ、呪いを掛けたまま行方不明になっちゃうんだから。

「まあエヴァンジエリンの事をよく知れたのは良かったけどよつ」と

ここで作っている田玉焼きをフライパンを持ち、空中でひっくり返す。

料理好きのライノックスに付き合わされて自然に覚えてしまったが、結構役に立っている。

田玉焼きを作った後、冷蔵庫から昨日の余りのサラダを出し、白いご飯をお椀によそつて朝飯の準備完了。

さてと、ミコウを起こすか。

「おーーミコウ。朝飯出来たから起きろー」

「…………劍山?」

「やうそつ俺、劍山だ。早く起きろー」

目を擦りながら起きたミコウはまだ眠そうだ。俺は頭を軽く叩いてまた寝ないようにし、朝食が出来ているテーブルまで手を引いて誘導。行儀よく席に座らせた。そしてここから、俺の戦いの始まりを告げるゴングが鳴った。

「いいか? 箸はこう持つんだ」

「いづ……?」

「おーおー、人を突き刺す気か? こうだこうー!」

ミコウが俺の部屋に居る理由は……まあ同じ一Fだった者同士、かなり不憫な奴と解つたので色々と考えた結果、俺が面倒を見るという事にした訳だ(何故かこの結論にエヴァンジエリンと絡繩は不満そうだった)。

ちなみにその不憫な部分と言つのは色々と重要な知識がスッポリ抜け落ちている事。

もちろん俺が今必死になつて教えている『箸の持ち方』も知らないし、『食べ物の食べ方』も知らなかつた。

「やうだそうだ。それでその持ち方で食べ物を掴んで食べるんだぞ」「いづやって……食べる

「 セウセウ 一 手 いざ 」

まあ唯一報われる事、それはミコウは物覚えが早いと言つ事だ。
重要な知識は物覚えが良いので充分に抜け落ちた所を埋める事が出来
るだろ？。

それにしても…………これって子育てなのか？
全国の父ちゃん母ちゃん、俺の場合つて子育てつて書つてどうしよう
か？

「 じゃあ行つてくからな。ちゃんとジャガーと一緒に留守番して
んだぞ 」

「 ……うん 」

とは言つたものの、スゲー心配です。

なんせ一気に同居人が増えたが、性格や年齢的には未熟な奴ばっか
りだ。

留守番がジャガー（子猫）ヒコウ……不安だ！？

近づいたヒコウ用の服等を買いに行かないといけねえし、それと
早めに理由を皆に説明しておかないと下手な誤解を招く恐れがある。
でもどうやって説明すれば良いんだ？ 物凄く悩む。

「 「ケン君おはよー！」 」

「おはようで」¹ざる

「よう、お前等か。おはよう」

俺がこれから的事を考えながら寮の出入口に向かっているとそこにはチビ姉妹と長瀬の姿があった。3人共笑顔で、俺に朝の挨拶をしてくる。

「向かう所は同じ、一緒に行くで」¹ざるよ

「行こうよー」

「行くですー」

そう言つてチビ双子姉妹は何故か俺の肩に乗つてきた。

お前等なあ……俺はバッグ持つてんだから横着しないで自分で歩け！！

とまあ、こんな事言つても聞くような奴等じゃないと解つているので心中だけで止めておく。せめて長瀬が何か言つてくれればなあ、こいつを見て微笑んでるだけだし。

結局あのチビ双子姉妹は電車乗る時以外は俺の肩に乗つていた。次からは絶対肩なんかに乗せてやらねえ。

そんなこんなで教室に着いた訳だが……入りにくい。

登校中には運良く出会わなかつたが、教室にはきっと仲良し運動部

4人組が居るだろ？

そしてミコウの事を聞いてくるだろ？なあ。正直言つて、どう答えて良いかまったく分からん。

「どうしたで」「ざるか？ 顔色が悪いで」「ざるゆよ」

「あッ！？ いやいや、何でもねえよ」

「？」

危ねえ危ねえ、長瀬は俺から感じる物を最初に見破つた勘の鋭い奴だからな。

でも俺から感じられる力つてのは、長瀬の他にも桜咲、龍宮、エヴァンジエリン、絡繹、タカミチ、学園長と、その手の奴等にはモロバレしているんだけどな。

「」「」でウジウジ悩んでいても仕方ねえや。……覚悟決めて入るか

俺は意を決して教室に入った。

さあさあ、質問でも何でも来い！

「恩山君おはよ～」

「やあ」

「おはよっです」

ん？ 意外と普通な朝の風景だ。

運動部四人組の姿もあるが、俺の事を見るなりミコウの事を聞いてくるかと思った。

だが普通に挨拶を交わしただけだ。一体全体どうなつてんだ？

「私に感謝するんだな」

「どういう事だ？ エヴァンジエリン」

エヴァンジエリンの話によるところだ。

昨日俺が帰った後にタコじいさんの所に行き、事情を話してくれたらしい。

更に許可を取り、ミコウを見た運動部4人組の記憶操作を行つたと
の事。

「これで俺が寮に帰る時にエヴァンジエリンが最後に訊いてきた「ソ
イツを見た奴はいるのか？」の意図がようやく理解出来た。

「助かつたぜ。朝から質問攻めにされて、朝倉にネタにされるのは
御免だからな」

「今回の件の礼は後日請求をせてもうひとつして、早くクラスの連中
が納得出来るような言い訳を考えておくんだな。じじいの方からは
責任持つて面倒を見る事、清く正しい同居生活をすれば構わないと
の事だ。私はあまり納得してないがな」

何でも俺が責任持てば良いのかじじいよ。色々とソシ「ヨミ所が満載
だが、今回は本当にエヴァンジエリンに感謝だ。請求する礼の内容
が気になるが、そんな事はどうでも良い。

とにかく今は『麻帆良パパラッチ』と恐れられている朝倉にネタに
されないだけでも嬉しい（前に猫じゅらしで猫と遊んでいる所を写
真に撮られ、クラスの連中にからかわれた）。

「ダーニー！ 暗い気分が吹っ切れた！ 今日一日頑張りつーーー！」

なんかもう重荷が取れた気がしてハイテンションだな、俺つて。
ミコウに関する言い訳も、ちゃんと考えておかなくちゃよ。

「それじゃあーいの所を誰かに訳してもらいます」

今やっているのはネギが担当する英語の授業。

相変わらず解りやすい教え方だが、ネギが問題を出すと殆どの奴が視線を逸らす。

視線を逸らさないのは雪広、近衛、富崎、那波、超、葉加瀬の成績トップクラスぐら이다。

ちなみに俺の成績は中の下だ。

でもこのくらいの問題は、教科書や参考書をパラパラ読めば結構分かる程度だ。

「それでは富崎さん、お願いします」

「は、はい」

いちいちネギに呼ばれる度に富崎は熱暴走したみたいに顔を赤くする。

俺には何故顔が赤くなるのかよく解らん。

「はい、ありがとうございました。次は……？」

突然教室のドアがノックされた。授業中に他の誰かが来るという事は何か起こったのか？

皆がドア付近に一斉に注目する中、ネギがドアを開けた。

「.....」

【ニヤア～】

「コケた、俺はコケた、椅子に座っているにも関わらず盛大にコケた。コケた俺にクラスの連中の視線が変わって一斉に集まる。エヴァンジエリンなんか開いた口が塞がらない様子だし、絡繆も多少驚いている様だ。

「あの～.....どなたでしょうか？」

「.....ミコウ.....剣山.....ビニ～？」

【ニヤン】

何故にここにいるんだ.....ミコウよ。

出番い編・第10話【妹になりました。……義理だけ】

【SHIDE・俺】

今教室全体が静まりかえっている。

なんせいきなり教室に黒い子猫を抱き抱えている、見知らぬ少女が訪ねてきたのだからな。

「剣山……どーー？」

しかも俺の名を言つてるし……。

あああああ……どーして来てんだ!!」ウヒジャガー……。

「えつ……あの女の子誰?」

「今、剣山つて……」

「恐山君の知り合い?」

うつ……視線が俺に集まつてやがる。気まずい、非常に気まずい。“助けてくれ”の視線をエヴァンジエリンと絡繰の方に送つてみるが……。

「「……」

はい、見事に視線を逸らされました。

この薄情者共め。

「えつと、恐山さんのお知り合いですか?」

対応に困ったネギが俺に問いかけてくる。

た、確かに知り合いで一緒に部屋に住んでいますけど……。

「恐山さん？」

今俺の顔は多分冷や汗でダラダラだろう。

いつまでもたつても返事が返つてこない俺にネギが困ったように首を傾げている。

咄嗟に思いついたこの方法でこの場を乗りきるしかねえ。

俺は席から立ち上がり、ダッシュでドアの方に向かう。

俺が茅たまごミー！」とシカは懇親な笑顔で迎えてくれた
だが、冷や汗ダラダラである今の俺にはまったく嬉しくねえ。

「と、言つ訳だネギ。少し俺は教室から消えるが、10分ぐらいで戻つてくる。必ずカタを付けてくるからな」

ポカーンとしているネギを無視し、俺はミユウの手を引いて教室から急いで退散する。

退散する際に俺の背中に突き刺さる殺氣が混じた視線に、俺はよう耐えたと思う。

「何でお前こんな所に来てんだよ！ 部屋で大人しく留守番してろつて言つただろ？！」

俺が向かつた場所は昼休み行きつけの屋上、そこに着くとセツセツミコウを問いつめた。

ミコウ曰く「俺の後を追つてきた」らしい（ジャガーを連れてきたのは一匹だと寂しそうだから）。

「つたぐ。よくもまあ誰にも気付かれたり、変な奴に絡まれずにここまで来たな」

「ジャガーが……案内してくれた」

あー……そう言えばヒーリー一帯をジャガーと一緒に散歩した事があつたっけか。

「イツめ。猫はなかなか頭が良いと言つたが、子猫と言えど、侮れねえな。

「しつかしへりあつかなあ。言ひ訳考えておいて、今日の夜ぐらいに全員集めてミコウの事を言おつと思ったが、この事態は想定外だつたな」

そもそも誰もこんな事は予想出来ねえ。予想出来たらエスパーの領域だ。

仕方ねえ。今教室が騒がしいかもしだねえが、言つしかないが。

「ほれ、ミコウ行くぞ。既にお前の紹介するから」

「紹介……？」

教室に着いてみると予想通り、騒がしい。

この状態じゃあ、授業なんか始まってねえだろつな。

ああ……すまねえネギ。この埋め合わせは必ず、必ずするからな。

「あー……今戻つたぞ」

「ダイノさん……」

悪かった、悪かつたぜネギ。だからそんな泣き顔で俺を見ないでくれ。

クラスの大半の連中もそんな冷めた目で俺を見ないでくれ、頼むから。

今からミコウの事を説明するから、な？

「あー、ゴホン。紹介が遅れてすまない。コイツは昨日ここに着いたばかりで、お前等に紹介してる暇が無かつたんだ」

「昨日ここに着いたの？」

「ああ」

タ「じじいからの口裏で、事情を知ってる奴等以外の連中は、俺のことをちょっと不憫な人だと思ってる（決して変な意味ではない）。

あー……このクラスの連中が信じやすい素直な奴等で心底良かつた。

連中がミコウの事に注目する中、俺は勇気を出して言った。

「名前はミコウ。俺の……俺の……義理の妹だ！」

「…………ハッ？」

やつべー……教室中が静寂に包まれてやがる。ダダスベりか？

明らかに俺の言つた事を信じてない様子の龍宮、桜咲、長瀬、工ヴァンジエリン、絡繩の5人は驚いたような、呆れたような目で俺を見続けている。

俺もあえてその目から視線を逸らす。

そのまま受け続けていたら、視線だけで俺は恥ずかしくて死んでしまいそうだ。

「か……」

「か？」

「…………かわいい…………」

突然の一言で静寂に包まれていた教室が再び騒がしいクラスに戻り咲いた。

ミコウが押し寄せる奴らにもみくだけられてくる。

「…………やめーーー！…………ミコウが苦しがってるだろーがーー！」

俺はミコウを集団から引っ張り出してやつた。

ネギもそれを見かね、連中を落ち着かせて席に座らしてくれた。

そしてお決まりの質問タイムが始まリそうになつたのだが、俺がそれを抑えた。

「悪いけど、質問とかは勘弁してくれねえかな? ロイツ、喋るのが苦手なんだ」

「えー! 残念」

「ぐー! 久しぶりに良いネタが入ったと思ったのに……義理の妹か。それに質問拒否とはねえ、ガードが固い」

はは、お前だけには絶対教えんぞ朝倉。良いネタにされてたまるか。

「あの~ // ュウセモ // に面て良~です。良いですから、授業の方を続けさせてください……」

「あつ……悪い」

ネギが授業を再開させようとした時、運悪くチャイムが鳴った。授業が進まなくて落ち込んでいるネギを、保護者である神楽坂と近衛が慰めている。

すまない、本当にすまないネギ。

昼休みになつても // ュウセモ // ジャガーは相変わらず連中に囲まれている。見るとい、昼食を一緒に食べている様だ。

「そんで俺と言えば……」。

「まつたく……咄嗟に考えついたのは“義理の妹”か。もつ少しマシな考えが思い浮かばなかつたのかお前は」

「しょ、しょうがねえだろ。咄嗟に考え付いたのがそれだつたんだよ」

「威張れる事でもないと思ひます」

冷たい視線の女達に囲まれていた。

「うづ……最近絡繆のツツコミが妙に冷たい氣がするぜ。

長瀬、龍宮、桜咲の3人は俺が必死に事情を説明してなんとか納得してくれた。

「それで学園長は何と？」

「俺が責任持つて面倒見れば一緒に暮らしても良いそづだ」

「やれやれ、学園長殿らしいでござるな」

「まつたくだな」

学園長の対応に長瀬達は呆れ顔だ。

それにして俺にはドンドンと新しいプロフィールが付くな。

元T.Fで、不憫な人で、黒猫を飼つてて、義理の妹がいて……キリがねえ。

「しようがない、じじいには私から話しておいてやる。ミュウは恐山の義理の妹だと言う事にしておけ、とな」

「何から何まで本当にすまねえ」

「ふん。ちなみに言つておくが、この件も前の礼に上乗せしておへからな」

「いやいやそれが目的かい！？」

くそつ、エヴァンジエリンにカリがどんどんと増えていくなあ。

請求される礼がスゲー気になるぜ。

ミコウには勝手に家を出ちやいけないとよく言い聞かせておいで。
それとジャガーにも余計な案内はするなど耳にタコが出来るくらい
言い聞かせなくちゃな。

出番い編・第11話【旅行の準備だ。これも面倒だけど】

【SIDE・俺】

チャイムが学園に鳴り響き、放課後のHRの時間を報せる。ネギが教壇に立つていつも感じでHRが始まると思った。

のだが、今日は何だか様子が違う。ネギの機嫌がかなり良いのだ。

あいつ、何か良い事でもあつたのか？

「えーと皆さん。来週から僕達3・Aは、京都・奈良へ修学旅行に行くそうで」

なるほど、修学旅行の事で機嫌が良いのか。

確かにあいつは修学旅行の話になると途端にテンションが高くなつたな。

ここいら辺の行動は、まだそこいらに居る普通の子供と変わらなくて見えるぜ。

「もー準備は済みましたかー！？」

「ーーーーーはーーーーー！」

ネギ以外にもテンション高い奴が大勢いるな。

対して綾瀬や長谷川の冷静な奴等は溜め息ついて呆れている。まあ、その気持ちも分からなくもない。

「ネギ先生。学園長がお呼びですよ」

「あつ！ はーい」

一時の間、チビ双子姉妹と騒がしくしていたネギは学園長に呼ばれて教室を出て行つた。

あのタコじじい、また厄介な頼み事をしそうな気がするな。ネギも不幸なこつた。

「さてと、修学旅行か。色々と準備しなくちゃいけねえな」

ついでに色々と忙しくて先延ばしにしていたミユウの服も旅行準備の時に買ってやるか。

だがしかし困った事に……俺に女の服の善し悪しが分からぬ。分かる訳がない。

女の服を選ぶのに、男のセンスが必要とも思えない。

「それに女の服売り場に、男の俺は行きにくいしなあ……誰かに付き合つてもらうか」

「……と言う訳なんだ。お前等に付いて良いか？」

「うーん。私は別に構わないよ。アキラは？」

「うん。私も構わないけど……」

俺が頼んだのは運動部仲良し4人組の中の2人、明石と大河内だ。ちょうど今から準備の為の買い物をして行く所を便乗させてもらつ

たのだ。

あとの2人の和泉と佐々木は先に買い物に行っているらしい、後で合流するらしい。

「買い物に行くのは良いけど、ミコウチちゃんの服の趣味とかは分かるの？」

「あつ……聞いた事ねえ」

はあ～……『修学旅行セール!!』と大きく書いてあつて物凄く目立つ店だな。

中に入つてみると生徒がかなり居て服をそれぞれ品定めしている。色々あつてどれを選んだら良いかよく分からん。

その大人数がひしめく中、先行した明石と大河内が選んだ服を持ってきて俺に見せる。

「これなんかどう？ ミコウチちゃん白が好きそうだし」

「子猫を連れてたから、猫が好きなのかと思つて選んでみたんだけど……」

明石はとにかく白い服、大河内は猫のイラストが描いてある服を持つてきた。

頭の中でこれを着たミコウを想像してみると……どうだろう？ 似合うだろうか？

やつぱり服の善し悪しは分からぬ。

つて、これじゃあ一人に付いてきた意味が無いじゃねえか！？

まあ、とりあえず俺はその2着を採用し、サイズを探して購入した。採用されて喜んでいた2人に俺は適当に選んだ事に申し訳ない気が物凄くした。

今思えばミユウつて身長は綾瀬と同じくらいなんだよなあ。サイズは意外と探しやすかつたな。

場所は変わつて、派手な飾りがいっぱいある違つ店。俺、明石、大河内の3人は服を探しに来た訳だが、ここも生徒がいっぱいだ。

「どこもかしこも、生徒だらけで暑苦しいぜ」

「どうしようか。この人混みじやはぐれけりつかも」

確かに。この人混みの中じや一緒に行動していくもたちまちはぐれてしまうな。

仕方ない、ここは背の高い俺が先導するか。

「行きたい箇所とかあるのか？ あれば俺が引っ張つていつてやるが

「えつ？ 流石にそれは大変じゃない？」

「これぐらい手伝わなくちゃ男としての面子が立たないんだよ。お前等ばつかりに世話になる訳にはいかねえしな」

明石が「じゃあお願ひしちゃおつかな?」と俺に行き先を言った。丁度正面の辺りか。

人混みも少ないし、突破はしやすいかもしねないな。

「ほら。手を離すなよ」

「う、うん」

「あつ……」

明石と大河内の手を掴み、俺はワザと田を鋭くし、一気に正面突破を開始する。

周りの奴等も俺の迫力に負けて、次々と道を空けていく。そうだそ
うだ、散れ散れ。

そして出発してから10秒も経たない内に目的に到着した。

「す、」——。あつという間に着いちゃった

「何と言つかむしろ、無理矢理道を開いたような気がするね」

ハツハツハ、それを言うな大河内。

でもああしなきや、人間つてのは道は開けねえよ。

そして色々と物色し、良い服を見つけた明石はすぐに購入。
対する大河内は気に入った服は無かつたようだ。

「大河内は行きたい箇所はあるのか?」

「私はここを見てみたいんだけど……恐山君は大丈夫?」

「場所によるが、変な心配はいらねえよ」

ここから結構先の所だな。生徒もかなりいて突破するのはかなり難しそうだな。

俺と大河内が壁にある店の見取り図でルートを確認していると、突然明石のバッグから賑やかな音が鳴り始めた。

「もしもし……うん、うん、解った」

あれが“けーたいでんわ”か。実際には初めて見るな。無線機にも似てる様な気がするぜ。

連絡によると、和泉と佐々木が店の外の近くにあるカフェで待っているらしい。

ここからは多人数で進むには難しいため、先に明石を2人が待っているカフェに行かせた。

この方が下手に迷子が出ないから、大河内1人に集中出来る。

「じゃあ行くぞ。俺の手を離さずにしつかり掴まつて」

「う、うん……」

一気に駆け出し、突破を試みる俺と大河内。途中つまずきそうになつたり、大河内と手が離れそうになるハプニングがあつたが、無事に着く事が出来た。

「ふう……何とか着いたか」

「さつきはあ、ありがとう……。つまずきそうになつたのを支えてくれて……」

「あれくらい当然だ。連れてく奴は、安全に導かないといけないしな」

それから大河内は気に入った服があつたようで、それを購入。連れてきてくれたお礼にと、俺の服も大河内が選んでくれた。選んでくれたのは恐竜の絵がプリントされた服だ。

やつぱり女つてのはセンスが良い。真ん中に描かれている恐竜のイラストが良いな。

無事に買い物を済ませた俺と大河内は、3人が待っているカフェへ向かつた。

「アキラ～、恐山くん、こっちこっち

カフェに着くと明石が手を振つて場所を報せてくれた。そこに行き、用意してくれた椅子に俺と大河内が座る。あ～疲れたぜ、準備つて大変なんだな。

椅子にもたれ掛かっていた俺の前に、和泉がメニューを差し出してくれた。

どうやら何か奢つてくれるらしい。

「恐山君は何を飲む？」

「……何でもいい。とにかく水分を補給したい」

「分かつた。アキラはどうする？」

「私は……アップルジュースにする」

「分かつた。それじゃあ、恐山君も同じのを頼むな」

注文を受けたウェイトレスが、5分ぐらい経つたあとにアップルジコースを持ってきた。

喉がとにかく渴いていた俺は、用意されたストローなんか使わずに一気に飲み干した。

「豪快やね。恐山君」

「喉が渴いてるからゆつくり飲めねえんだよ」

「そんな事したらむせちゃうよ。ゴホゴホつて」

「そんなにヤワな喉じゃねえよ」

「いや、喉とかの問題じやないと思つよ……」

優しい感じのする笑い声が響く。

「コイツ等とはあまり話した事が無かつたし、交流を深める良い機会かもしけん。コイツ等つて、根は明るい奴等ばかりだしな。

「そう言えば、恐山君の頬の傷つて、何か由縁があるの?」

「ん? この傷か?」

「うんうん。最初見た時はさ、ヤクザ関係の人かと思つちやつたもん」

「お前……俺をどう言つ田で見てんだよ」

邪気がまったくない田で質問をぶつけてくる佐々木に、俺は呆れたよつの気持ちになる。

するとさつきの佐々木の質問を悪いと思つたのか、和泉と大河内が佐々木を叱つた。

明石は……ただ興味があるような視線をくれているが。

「まあ良いや、教えてやる」

「恐山君、無理せんでええよ。まき絵のきまぐれな質問やし
「別に無理はしてねえよ。この傷はな……俺の尊敬する、ある男が
付けたモンなんだ」

尊敬する男とは無論、「コンボイのことだ。

コンボイの名は伏せて、運動部4人組に、対決の時のこと話を話して
やつた。

俺の話を聞く4人の色々な反応が、以外に面白かった。

「へ……恐山君、その人のことが本当に好きなんだね
「好きとかってのは分からねえけど、今でも尊敬してるってことは
確かだな」

「戦いのあとに出来た信頼関係か……漫画みたいな話だね
「言つておくれが、嘘じやねえぞ」

それから俺達は他愛もない会話を続けた。

気が付くと、周りはあつという間に暗くなつていた。

今更ながら、時間が経つのは早い気がする。

「そろそろ帰ろつか?」

「うん! やだね」

久しぶりに沢山話した気がする。改めて思うが、こういつのも悪く
ねえ。

記憶操作がしてあってコイツ等には記憶が無いが、また前のような
おバカ集団に絡まる危険性があるからな。

同じ寮に住んでて、今回は色々と世話になつたからな。
最後まで送つて行つてやるか。

俺が前を歩き、近寄つて来る男共に睨みをきかせて寮へ向かつ。その結果、一回も絡まることなく、無事に寮に着く事が出来た。面倒なことが無くて、助かつたぜ。

寮に入つたあと、俺達はお互いの部屋があるといひで別れた。だが俺は、別れる前に服を選んでくれた大河内にお礼を言つておいた。

「服選んでくれてありがとうな。個人的には気に入つたぜ、コレ」「どういたしまして」

ミユウに負けず劣らずの笑顔だな、大河内の奴。まあ、お礼を言われて嬉しくない奴はいないだろ。

「修学旅行、まちまち楽しもうぜ

「うん！」

俺と大河内は手を振つて別れた。普段の表情からは想像もつかねえな。

さて、ミユウはこの服を気に入ってくれるかな？ ジャガーにもエサをあげないといけないし、早く帰つてやらないとな。

修学旅行編・第1-2話【初つ端から、こなんなんですか?】

【SIDE・俺】

待ちに待つた修学旅行当口。

俺はミユウとジャガーを連れてじじいの所に向かつた。
こんな朝っぱらから何の用があるんだか知らないが、用件は早く済ませてほしい。

「うひーっす……」

「おはよう劍山君。突然呼び出してすまないのぉ」

「あんたよ。急に呼び出しあがつて……」

つたく、前おきの挨拶は良いから、用件を早く言つてくれ。

俺は、朝の5時に起きて朝食作りと荷物の確認とかして眠いんだからら。

それに……集合場所に向かつ前に、ミユウとジャガーをエヴァンジエリンの家に預けなくちゃならねえんだから。

「うむ。君にワシの孫娘であるこのじいの護衛を頼みたいのじゃ」

「ハッ？ 近衛の護衛？」

また唐突に、とんでもない事を言い出すな、このじいは。
何で近衛に護衛がなんかが必要になるんだ？ 自分が溺愛してるからか？

「何で護衛が必要なんだ？ 誰かに狙われたりとかしてんのか？」

「理由は話すと長くなるんじゃが、聞いてくれるかの？」「あ～……なるべく短くまとめてくれると助かるぜ」

じいさんの話によれば近衛は凄まじい魔力を秘めた魔法使いなのだが、親の方針からか普通の女の子として生活してもらいたいとthought思ひがあり、今まで秘密にしていたのだと言つ。

しかし、近衛が麻帆良学園に通つているのを快く思つてない京都にある『関西呪術協会』なる物がこちらにイヤガラセをしてくると考えられる為、それから守つて欲しいのだという。理由はこっちの『関東魔法協会』（治めているのはじいさん）と向こうの関西呪術協会の仲が悪いから、らしい。

「ガキのケンカかよ。もつひとつ仲良く出来ねえもんかね？」

「それは大丈夫じゃよ。ネギ君に仲直りする為の新書を渡してある。前に頼んでおいたのじゅ」

なるほど、前にネギを呼んだのはその為か。

しかし、わざわざ敵の本拠地に乗り込むつて事は結構な危険が伴うんじゃねえか？

そこら辺は考へてんのか？ 」のじじいは。

「まあ、頼まれたからにはそれなりの仕事はするぜ。」 」のじじい時の

ために、一応サーベルを常時携帯してんだからな」

「迷惑を掛けるの。それと護衛には刹那君も一緒に、協力して励んでくれ」

へえ～桜咲も護衛をやってんのか。

初めてそんな事知つたぜ。

…… いはね！ もつすべ集合時間じゅねえか。

早く行かなきやクラスの連中に文句言われちまつ。

「時間が迫つてゐるから、そろそろ俺は行くぜ。それに、コイツ等をエヴァンジエリンの所に届けなくけや いけねえし」「その必要は無い。じつちから来てやつたぞ」

急いで部屋から出ようとしていた俺を止めたのは、エヴァンジエリンと絡繰だつた。

ミコウヒジャガーを受け渡す時間にだいぶ遅れちまつたからな。向こつから来てくれた。

「まつたぐ。貴様と言う奴は、約束の一つも守れんらしいな」「そつカリカリ怒るなよ。ミコウヒジャガーの事、よろしく頼むぜ」

ミコウヒジャガーを引き渡し、俺は集合場所である大宮駅へ向かうとした。

のだが、ミコウが俺の服を掴んで離さない。行かせたくないらしい。

「昨日も言つただろ？ 俺は修学旅行で、暫くお前とは一緒に居られないんだ。修学旅行が終わつたら一一番に帰つてきやるから、な？ だから手を離してくれよ」

「…………」

ミコウはまだ納得していなそつな顔だったが、ゆつべつと頷いて手を離してくれた。

今思えば、こんな顔をしたコイツつて初めて見る。

「お土産も買つてきてやるよ。せひせひ、ハウアンジンと絡繰の2人にもな

「期待しています。恐山さん」

「当たり前だ。忘れたら許せんぞ」

「怖え怖え。そんじやあ、行つてへるぜ」

『登校地獄』の呪いのせいで修学旅行に行けないアイツの分も楽しんできてるが。

それと写真も撮つてきてやるわ。エヴァンジエリンの他に、ミコウが喜ぶかもしれない。

ギリギリだったが、無事に大宮駅に到着。

どうやら残りは俺一人だつたらしく、クラスの連中から「遅いよ」とか「寝坊した?」とか「その大きな荷物何?」とか聞かれたが、ノーハメントを通した。

でも携帯しているサーベルは布で隠しているとはいって、流石に目立つてしまつ。

こいつのを、場から浮いていふのがどうつか。

「では1班から6班の班長さん、お願ひします」

ネギはやはりテンションが高い。あいつが一番この旅行を楽しみにしていたからな。

でも今回はあいつにとつて大変な仕事でもあるんだよな。

ちなみに俺の所属班は6班で、班長は桜咲だ。

「おい、俺達つて3人だけだが、どうするんだ？ 規定の人数じゃねえぞ」

「…………」

「そうですね……私がネギ先生に聞いてきますよ」

流石桜咲班長、仕事が速くて助かります。

それからネギの提案で、人数が少ない俺達は何処かの班に加えてもらう事になった。

ザジは3班、俺は4班、桜咲は5班になった。

偶然かもしれないが、良い組み合わせをネギはしてくれた。

近衛がいる班に、護衛役の桜咲がいれば、敵も迂闊には手出しさは出来ないだろう。

「せつちゃん。一緒に班やね」

「あつ…………すいません。失礼します」

「せ、せつちゃん…………」

何だ？ 桜咲の奴、逃げる様に向こうに行つちました。

随分と冷たい態度だが、桜咲つて近衛の事嫌いなのかな？

でも嫌いだつたら護衛なんかやる筈がない。……訳ありか？

なんか気になる事が山ほどあるが、4班の奴等がいる席に行くか。

「…………」

「お？ どうしたザジ」

俺が席に行こうとしたらザジが服を掴んできた。

ミコウと生活し始めてからと言つもの、口数の少ない奴の言いたい事が分かるようになつてきた気がする。ザジだつてよく見ていれば、微かに表情や唇が動くから、何を言いたいか大体分かる。

「…………」

「俺と一緒に行動したかった？　しうがねえだろ、班の人数が足りないんだから」

「…………」

「分かった分かった。自由行動の時間に暇があつたら一緒に行動しようぜ」

「…………」

「そんなに嬉しがる事か？…………所でお前等、見せモノんじゃねえぞ」

周りの奴等がスゲー目で俺を見ている。そりやそうだ、傍から見れば一方的に俺が会話してるようなもの。無理だと思うが、ザジにはもつと喋つてもらつて表情豊かな奴になつてほしい。

でなけりやこれからお互いに会話がじづら（ザジの方はそうでもなさそうだけど）。

「ふあ～…………朝早く起きたから眠いなあ」

4班が座っている席に向かつた俺は座るなり口を開け、大きな欠伸をした。

いつもなら6時に起きてパツと朝食を作るんだが、今日は修学旅行だからな。

荷物の最終確認とかあって、とにかく面倒だった。

なんか1回眠らないと、欠伸が何回でも出そうな気がする。

「眠いなら寝ると良い。時間を言つてくれれば、私が起こしてあげるよ」「悪いな龍宮。それじゃあ……1時間経つたら起こしてくれ」

起こしてくれるといつも龍宮に時間を言い、襲い来る睡魔に身を任す。この分ならすぐに眠れそうな気がする。

そんな気がしたんだが。

「おい……そんなにジーッと見られてると寝にくい」

「えー！ だつてダイノ君の寝顔見るのって初めてなんだもん」

「普段仏頂面だしね。眠つてる表情はレアだよ」

「テメエ朝倉！ 仏頂面とか言つな！」

大量の視線を感じて周囲を見渡してみると、横の席の奴とか前の席の奴が、穴が開くくらい俺を見ていた。中にはカメラを持つてる奴までいる。

俺の寝顔なんか撮つてどうすると云つのか……。

しかも右隣の長瀬に至つては食いついて見ている。何だか頭痛がしてきた……。

俺は鬱陶しいギャラリーを散らすと、再び睡魔に身を任した。頼むから、電車の中へうごめつて寝させてくれ……。

「…………うるせえ」

せっかく寝付いたと思ったのに周りがスゲー騒がしい。

龍宮がまだ起きてくれてないという事は1時間経つてないんだよな。

まったく、しょうがない連中だ。少しの間静かに出来ないのか。

【ゲコッ】

「あつ？」

なんか俺の顔の上に載ってきたぞ。

何だこりや……カエルじゃねえか。

ん？ 何で電車の中にカエルが居るんだ？

「あつー？ なんだコリヤーーー！」

見てみると大量のカエルが車内を飛び回っていた。ゲコゲコ鳴き声がやかましい。

この異常事態に生徒がパニックになつており、中には氣絶してる奴もいる。

誰だよ、こんな大量のカエルを持ち出したのはー！

「ネギ！ どうしたんだよコレは」

「ぼ、ぼ、僕にも分かりません」

「そんな事より、アンタも手伝つてよーー！」

神楽坂に言われ、しぶしぶ俺はカエル集めを手伝つた。表面がヌルヌルしてて掴みにくいや、カエルつてのは

それから何分かしてカエル全てを回収成功、総数は100と8匹。かなりの数が居たもんだな。

「あーったく！ お前もちつとは手伝えよ、龍田

「こういう楽な仕事は剣山に任せせるよ。私の出る幕じゃない

「ちつ！ 調子の良い事を言いやがつて」

まったく、手伝つ氣はつかよ。それに出来る幕つて何だよ、出来る幕つて。ん？ 隣の長瀬の様子がおかしい。顔を真っ青にしてブルブル震えている。

「どうした？ 長瀬

「せ、せ、せ、拙者は……力、力、力、カエルがダメなんじゃれるよ……」

意外だ。スゲー意外だ。長瀬の弱点がカエルだつたとは……コイツも女つて事か。

しつかしこの大量のカエル、もしかしたら関西呪術協会のイヤガラセなのか？ だとしたら物凄く下らない。

でもこのまま小さいイヤガラセを受け続けていたら流石に修学旅行が台無しになるな。

この先の道中が心配で堪らんぜ。

修学旅行編・第1-3話【トラブル、トラブル、またトラブル！？】

【SIDE・俺】

車内で一騒動あつたが、無事に京都・奈良に到着。最初の見学場所である清水寺に、俺達は向かった。

こんなところに来るのは初めてだが、景色が良いな。それに空気も美味しい。

「『』が清水寺の本堂、いわゆる『清水の舞台』ですね

「『清水の舞台』？」

「はい。本来は本尊の觀音様に能や踊りを楽しんでもらう為の装置であり……」

綾瀬がヤケに詳しい。なにげにこういう場所が大好きなのか？それにはかなりマニアックな感じがするのは気のせいか？

それにしても、俺つて小難しい説明は苦手だ。立つてゐるのに、何だか眠気が襲つてくる。

「夕映は神社仏閣仏像マニアだからね

マニアだったのか、綾瀬。

だからそんなに詳しいのも納得出来る。

「うわー……京の街が一望出来ますね」

「あんまりはしゃぐと、そこから落つてこひるがネギ」

「はーい！」と元気よく返事するネギ。

本当に楽しみにしてたのは解るが、お前が見せる笑顔に、鼻血を出す雪広なんかすぐに犯罪に走りそうだぞ。

「ん？　あいつ……あんな隅から見てやがるのか

柱の一角に田をやるとそこには桜咲が居た。

あいつの目線の先にはもちろん近衛の姿がある。

だが、あんなに遠くに居なくとも良いんじゃねえかと、俺は思う。むしろ側に居てやつて、護衛と街中の見学の両方をすれば良いのに。

「しょうがねえな……」

小さい溜め息をつき、俺は桜咲の元に向かう。桜咲の視線が俺に移動し、警戒心を醸し出す顔になった。別にお前を取つて食つたりはしないってのによ。

「……何かご用ですか？」

「何でそんな隅から見てんだ？　護衛すんならもつと側にいてやれば良いじゃねえか」

俺がそう言った途端、桜咲の顔が驚きの表情に変わった。もしかして「イツは俺も近衛の護衛に付いている事を知らないのか？」

「な、何故その事を知つているのですか！？」

「どうやら本当に聞いていないらしい。じじいめ、情報伝達はもつと早めにしておけ。

味方同士なら尚更だ。」

「じじいから頼まれたんだ。お前と協力して近衛の護衛をしてくれ、つてな」

「……………そうですか」

「コイツつてどことなく境界線みたいなのを引いて距離を取つてゐる様な気がする。」

今回だけじゃ無く、仕事をたまに一緒にやる時もそうだ。龍宮とも長くコンビを組んでる様だが、教室で他の奴等との日常の会話なんか聞いた事が無い。するとすれば、仕事仲間との、今後の仕事話だけだ。

「まあ何だ、ともかく側にいてやれ。近くにいた方がなにかと良いぞ」

「余計な気遣いです。私は私のやり方で護衛します」

けつ、随分な言い方だぜ。

でもお嬢様つて……近衛の事か？

珍しい呼び方をするもんだな、コイツつて。

「余計な気遣いか。じゃあ訊くが、何で近衛に冷たいんだ？ 近衛の事嫌いなのか？」

「……？ そんな事ありません!! 私は…私は…」

凄い勢いで否定した。表情も何所か悲しげだ。こりやあ……相当深い根がありそうだ。

まあ、嫌々やつてゐる訳ではないと分かつただけでも収穫物か。

「そつか。嫌いな訳じやないんだな。そんじゃあ、仕事仲間として1つ言つておくぜ」

「……何ですか？」

「電車の中では、悲しそうだつたぞ。あいつ」

「ツ！？」

「護衛するべき奴を、護衛する奴が悲しませてたら、世話ねえよな」

最後にそつ言つた俺は、桜咲の前から別の場所に移動した。ちょっと余計でキツイ事を言つてしまつただろうか。

初っぱなから仲間との関係を悪くしてどうするんだよ俺！

だが、あいつの態度はなんとなく気にくわねえから、とりあえず言つてみた。

しつかしどうして、俺はこんなお節介な性格になつちまつたんだ？ どつかの誰かさんの性格が移つたか？

「恐山、何をしてるんだ？」

「ほえ…何だ、龍宮か」

考え事をしている時に不意に声を掛けてきた龍宮に俺は変な声で返事をしてしまつた。

その事に龍宮が首を傾げてゐるが、気にするなど言つておいた。

「これから地主神社に移動するらしい。そんな所でボーッとしてる」と、置いてけぼりを喰らつておいた。

それはまずいな。

こんな初めて来た所に置いてけぼりを喰らつてしまつたら絶対にヤバい。

と言つか、ネギや一部の生徒が影も形も無く消えてやがる。

1分ぐらいあいつ等はジッとしてられないのだらうか。

更に言えば、隅に居た桜咲もいつの間にか消えている。
全てにおいて遅れを取つてゐるな、俺つて。

「じゃあ一緒に行こ」。4班も俺とお前しかいないみたいだし
「そのつもりだよ。だから呼びに来たんじゃないか」
「そりゅ どうも……」

へえ……龍宮もこんな笑顔を見せるんだな。
いつも教室や仕事では冷静な表情しか見た事がない。
長瀬、龍宮と、今日はいつもと感じが違う奴をよく見る。
こういうのも修学旅行の楽しみなのだろうか。

「むむっ……なんか恐山君の辺りから甘酸っぱいラブ臭が……」
「何アホな事言つてるですか、ハルナ」

何か頭が痛え……早乙女が何か得体の知れない臭いを嗅ぎとつてる。
よく見ると、何故か龍宮の頬がほんのり赤い。なんなんだ。

俺と龍宮が神社に着いてみると雪広、佐々木、富崎が田を騒りながら歩いていた。

何だ？ また何かの新しい遊びか？

「あいつらは何をやってんだ？」

「ああ。あれは『恋占いの石』って言ってね、目を瞑つて、私達の

近くにある石から向こう側にある石にたどり着くと、恋が成就するらしいよ」

パンフレットを見ながら龍宮が丁寧に説明してくれた。
まあ、要するに、俺にとっては全然興味が無い物つて事だ。

「まあ成就する様にがん……あつ！」

三人の行く末を見守つていると前をリードしていた雪広と佐々木が突然悲鳴と共に消えた。

現場に急ぐと二人は落とし穴に落ちており、その中にはまた力エルの御一行が居た。

何で関西呪術協会の奴等は力エルを推すんだ？

もの凄い力エル好きがいるのか？ どっちにしても、物凄くうんざりしてくる。

「恐山さん！ そこで眺めてないで助けてください。クラスメイトが困っていますのよ！」

「ちつ！ それか人に助けてもらう態度かつての」

ネギと神楽坂を手伝い、落ちた2人を助ける事に成功。
落ちていない宮崎はいつの間にかゴールしていたりする。
もしかしてあいつが隠れた強者なのか？

気を取り直し、場所は変わって音羽の滝。

そこに流れる3筋の水はそれぞれ健康・学業・縁結びとなつており、飲むと成就するらしい（龍宮談）。

つーか左に人数が行きすぎだろ！ 後ろに並ぶ人が迷惑してんじゃねえか！

しかも横に居た筈の龍宮もいつの間にか列に混じつてるし。

「つたく……何であんなのに夢中になれるのかね」

「恐山さんは行かないんですか？」

「悪いが、興味は0。ナッシングだ」

「そうですか？ 音羽の滝の他に、楽しい物は沢山ありますよ。たとえば……おみくじとか」

「おみくじねえ……ネギもまだ子供だし、そういう物を信じる年頃なんだろうな。」

「ん？ 何か滝に行つてる連中の様子が変だぞ。」

「おいネギ。あれつて何か変じやねえか？」

「えつ？」

俺とネギが、様子がおかしい滝の方に行つてみると、そこにはバタバタと倒れている連中が居た。なんだか顔がほんのり赤く、心なしカ、酒臭え。

「……何かみんな、酔いつぶれてしまつたようなのです」

「ええーっ！？」

驚いたネギが滝が流れている建物の屋根を調べてみると、大きな酒樽を2個発見。

このせここの手口は関西呪術協会のイヤガラセだな、絶対に。
ちくしょつ……これだけみみつちいイヤガラセが続くといい加減頭
に来るなあ。

犯行に及んでいる所を見つけたら真っ先にぶん殴つてやりてえ。

「何で修学旅行に来て、酔っぱらつた連中の世話をしなくちゃいけ
ねえんだよ……」

酔つていな生徒総動員で酔つた生徒を運び、近くの茶店の椅子に
座らせて酔いを覚ます。

関西呪術協会の奴等め……面倒な事をしてくれたよ。

「きょ～やまく～ん！」

「どわつ！？ 大河内かつ！ ……ぐほつ！ 酒臭い！」

介抱していた俺の後ろから、突然顔を真っ赤にした大河内が抱きつ
いてきた。

こ、コイツも飲んで酔つてたのかよ！？ な、何か意外だ。

「ウフフフ……きょ～やまく～ん」

「分かつた、分かつた、分かつたから大河内。頼むから抱きつくな
をやめる、その怪しい笑みをやめてください……」

「い～や～だ～」

質の悪いそこら辺のガキかお前は！？

しかしどうすればいいこの状況。

後ろから大河内が俺の首に手を回して抱きついてるし、時々吐く息

がもの凄く酒臭い。

このまま吸い続けていたら俺……いつか吐く。絶対に吐く。

「剣山殿……」

「恐山……」

「うつー? 長瀬と龍宮が俺の田の前にいる。しかも一人の田が……虚ろだ。

大河内と同じく顔がほんのり赤く、酒臭い。

あー……何か展開が読めてきましたよ。

「アキラ殿……抜け駆けはダメで、じれりやよ~」

「そういうお前もだぞ、楓。きょ~やま~……」

「お前等やめるーっ!!!!」

ネギと神楽坂が新田と瀬流彦を何とか今起こっている事態を誤魔化している間、俺は3人に襲われた。

が、スキを突いて気絶させる事に成功し、事なきを得た。

心配でやつた来たしづなも誤魔化し、酔つた連中とそうでない連中をバスに押し込んで強制的に旅館に向かう事となつた。

「ちくしょひ……初日からこんな騒動ばっかりかよ。先が思いやられるぜ」

今日の出来事をぼやきながら俺は旅館にある露天風呂に向かっている途中だ。

今日の嫌な出来事は風呂にゅうへり浸かりながら忘れよう。
男湯の入り口に入ると、中には半脱ぎのネギが居た。
部屋にいないと思つたら風呂に入らうとしてたのか（俺とネギは同室）。

「あつ！ じつも、恐山さん
「ネギも今から風呂か。丁度いいや、一緒に入らうか」
「はー！」

脱衣所で俺とネギは服を脱ぎ、腰にタオルを巻く露天風呂場のスタイルになる。
扉を開けてみるとそこにはかなり大きい露天風呂があった。
早く入つてみたかったので互いの体に湯を掛け合ひ、湯船に浸かった。

「風が流れてて気持ちが良いですね～」
「ああ、今日の疲れが一気に取れるな。お前も大変だな、新書を届けなくちゃならんのに」
「はい……えつ？」

あつ……いけね、口がすべった。

俺のニースで、隣のネギが驚愕の表情で俺を見ている。

「な、何で恐山さんがその事を……」

「ああ、じつはなつたから言つが、俺もお前と同じでこいつち側の関係者だ。じじいからお前の話は聞いてる、魔法使いだつて事もな」

未だに驚いているネギにこれまでの事情を説明し、何とか分かつてもらつ事が出来た。

まあ、早く理解してくれて助かるぜ。

じゃあ俺ツチも氣兼ねなく話が出来るな。恐山の兄貴、俺ツチはオゴジヨ妖精のアルベル・カモミールつてんだ

「へえ……オゴジヨの妖精なんて初めて聞くし、初めて見るな」

突然オゴジヨが喋つても驚かない自分が、今更ながら怖く思つ。少しづつだが、この世界に慣れていつてる証拠だなこりや。

強い味方が出来たじやねえか兄貴。これなら桜咲刹那と対等に渡り合えるぜ

「あつ？ 何だそりや。どういう意味だ？」

話によると桜咲を関西呪術協会のスパイだとネギとオゴジヨは思つてゐるらしい。

それはもの凄く的外れな考えだな。甚だしいにも程があるぞ。

桜咲の疑いを晴らす為、俺はネギとオゴジヨに桜咲の事を説明した。話す内に、1人と1匹の表情がみるみる変わる。

「桜咲はスパイじやない。仕事を一緒にしてきた俺が保証するから安心しろ」

「はあ……良かつた。僕の生徒がスペイじゃなくて
う~ん……

俺の説明にネギは安心した様だが、オゴジヨの方はまだ納得しない様だ。

まあしようがねえか、桜咲も誤解される様な行動を取つてると言えば取つてるもんな。

あれ？ どうしたネギ。脱衣所の方を見て。

「誰か来たみたいですよ。男の先生方かな？」

「げつ！ と言つことは、新田が居る可能性があるって事か。風呂場でガミガミ言われるのは、流石に勘弁だぜ。」

「えつ…… あれば…… うわわわわ……」

脱衣所の方を見ていたネギの顔が急に青ざめた。コロコロと表情が変わるな、お前は。

「お~お~、どうしたネギ」

「やべ~よ~ 桜咲刹那が入つてきたんだよ~！ ダイノの兄貴

「マジで！？」

「ど、どうなる俺達2人と1匹！？」

【SIDE・桜咲刹那】

「ふう……」

修学旅行初日から関西呪術協会からの妨害が頻繁に起つてしまつた。

その妨害には何とかお嬢様が巻き込まれてはいない様だが、油断は禁物だ。

「困つたな……」

私は桶で湯船の水をすくい、体に掛ける。

今日は妨害の後始末で少々疲れてしまつた。

魔法使いであり、担任であるネギ先生を頼りにしていた。のだが、対応があまりにも不甲斐ない。

敵のこれから襲撃が心配だが、私には気なることがある。

「…………」

昼間、清水寺で言われた恐山さんの言葉が頭に浮かぶ。

私がお嬢様を悲しませている……そうだとしても私はお嬢様の側にはいられない。

話す事さえ出来ない、むしろ資格が無いのだ。私は普通の人間とは違つ化け物だから。

「でも……恐山さんは、何処か私と同じ感じがする」

恐山さんは不思議な人だった。最初に学園長先生から紹介された時、確かに普通の人間とは違う違和感を感じた。まるで私と似ているような……人外の物のよつな……そんな感じだつた。

しかし、学園での生活を見ていると普通の人と何も変わらなかつた。その事が私は羨ましかつた。誰とでも気兼ねなく話すことが出来る恐山さんが。

何より、お嬢様と普通に話せる恐山さんが……とても羨ましかつた。

「私にはそんな勇気が無い……只の臆病者だ……」

何度も話そうと思った。

しかし、こぞ拒絶された時の事を考えるととても話す事など出来なかつた。

怖い、とてもなく怖い。

お嬢様に拒絶される事が、化け物と罵られる事がとてもなく怖い。

自分は化け物だと自分でも認めている。

だが、それをお嬢様に言われる事が何よりも辛く、怖い。

「本当に臆病者だ……私は。……はっ！ 誰だ！－！」

考え方をして油断した。露天風呂から何者かの気配がある。私は手元に置いてあつたタバコを取り、構えた。気配は私から遠ざかる。逃がさない。

「逃げるか。神鳴流奥義……『斬岩剣』……」

【SHIDE・俺】

オゴジヨから桜咲が入ってきたと言われ、パニックになる俺等。こんな所を見られたら100%の確率で誤解されるだろう。下手すれば桜咲の持っている剣で全員両断されてしまうかもしれん。

俺とネギは何とかバレない様に風呂場から逃げようとした。だが、突然岩が真っ二つに斬り裂かれた（その際ネギの髪の毛のアソテナも斬られた）。

俺達は瞬間、その斬れ味に身を固くした。

「うわっ！」

「危ねえ！？ 桜咲ッ！！ てめえーこの野郎！！」

もう少し逃げるのが遅れていたら俺とネギは岩もろとも真っ二つに斬られていたろう。

ネギは九死に一生を得て泣いているし、俺なんか思わず大声で怒鳴つてしまつた。

桜咲も俺の大声で正体に気付いたらしく、慌てた声を出した。

「えっ！ きょ、恐山さんッ！？」

「そうだよ！ ついでにネギも一緒にー！ 担任と仕事仲間を殺す

「氣かッ！？」

怒鳴りながらもネギを泣き止ませていると、桜咲が慌てて俺達の方まで近づいてきた。

俺達の前に来た桜咲は、さつきの事を必死に謝罪する。

「ほ、本当に申し訳あつませんー、怪しい氣配がしたもので……」
懸命に謝られてると言いにくい。

ネギは顔を真っ赤にして、必死に桜咲から田を逸らしている。
当の俺も、頭をポリポリと搔いて田を逸らした。

「あ、あの……桜咲さん」
「は、はい？」
「あんな……体隠せ」
「えつ……キヤアアアアー！？！？」

桜咲はタオルを体にも付けないでこっちに来たので全裸だった。
俺に言われ、桜咲は湯船に急いで体を沈めた。
顔なんかもうゆでだこみたに真っ赤で滑稽だ。

とりあえず俺は桜咲が近くに掛けたタオルを急いで持つてきてやった。

体にタオルを巻き、事態を何とか収集（巻いている間はもぢりん、俺達は遠い方を見ていた）。

「え……改めて申し訳ありません。ネギ先生、恐山さん」
「たく、次からもつと相手を見て攻撃しろよな。シャレにならねえ」

「恐山さん、もつたの辺でいいですよ。僕はもつて戻して……」

ひやあああああッ！－！

話している途中で、露天風呂に響いた大きな悲鳴。
この声……聞き覚えがあるぞ。

「このかお嬢様！？ くそつ！」

悲鳴を聞き、桜咲が一目散に脱衣所に走る。
俺とネギも後を追いかけた。

兄貴達、さつとまた関西呪術協会の奴等の仕業だぜ

確かにオコジマの言う通りだらう。

今まで質の悪いイヤガラセ程度だつたが、今回もその類か？

俺達が急いで脱衣所に駆け込むと、そこに広がっていた光景に、俺達は睡然とした。

「いやああ～ん！？」

「ちょつ……ネギ！？ なんかおサルが下着を一ツ！？」

なんともまあ……普通の男が駆け回って喜びそうな光景がそこには広がっていた。

何匹もの小猿が神楽坂と近衛の下着を剥ぎ取ろうとしているのだ。

俺は何も見てないんだ、俺は何も見てないんだ、俺は何も見てないんだ、俺は何も見てないんだ、俺は何も見てないんだ、俺は何も見てないんだ、俺は何も見てないんだ、俺は何も見てないんだ……。

「あ！ セツちゃん、ネギ君、恐山君！？ あ～ん、見んといで～ツ」

「え？！？！？ 一体コレは……！？」

「違う違う違う違う違う違う！？ 僕は何も見ていない！ 見ていらないんだあああ！！」

「な、何をしてるんですか！？ お二人共、しつかりして下せ～！？」

？」

何か桜咲の声や神楽坂の声やサルの声が聞こえる気がするが、僕は今それどころじゃない。

こんな事で慌てるとは……僕は戦士としてまだまだしげ……。

「ちょっと3人共、このかがおサルにさらわれるわよ～！」

「ひゃああ～！？」

神楽坂が大きく叫び、僕は正氣を取り戻した。

見ると脱衣所から何匹ものサルが、近衛を連れて行こうとしている。まだ慌てているネギを置いて僕は先に追いかけ、その後から桜咲も続く。

「！」の野郎！～！」

近衛をサルから取り返せる距離まで僕は近づいた。そこから一気に跳んだ。

だが、途中でサル共に方向転換された僕は、そのまま湯船に頭からゆっくりとダイブ。

どちらしよう！ 逃がした！～！」

「お嬢様！」

俺の後に続いていた桜咲が近衛にすぐ近くに近づいていた。持っている刀を構え、一気に振るつた。

「神鳴流奥義……『百烈桜花斬』……」

構えた桜咲が剣を振るつと、一瞬にしておサルが斬られ、紙になつた。そして腕には助け出した近衛の姿。どうやら傷1つ負つていない様だ。

それにしてあのおサル……生き物じやなかつたのか。

「このかーーー！」

「大丈夫ですか！　このかわーんーーー！」

少し遅れてネギと神楽坂も後を追つてきた。

近衛は大丈夫だ。傷も無いから無事だ、無事。

「せ、せっちゃん。なんか、よーわからんけど……助けてくれたん

?　……あ、ありがとう」

「あ、いや……」

近衛がお礼を言うと桜咲の頬がみるみる赤く染まつていぐ。そして急に抱えていた手を離し、走り去つてしまつた。あいつ……その行動が近衛を悲しませる原因だつて言つのが分からぬのか。

今の近衛の顔は寂しそうであり、悲しそうだつた。

「せっちゃん……」

「ちよつと……何よ、今のは

……今更なんだが、湯船にダイブした俺つて蚊帳の外?
だれも声を掛けてくれないのが、凄く寂しいんだが。

風呂から出た俺達は浴衣に着替えて一息ついた後、近衛から桜咲との関係について聞く事が出来た。

近衛と桜咲は小さい頃によく遊んだ幼なじみらしく、京都の広い屋敷で育つた近衛にとつては初めての友達だつたらしい。

しかし、麻帆良に引っ越してからはあまり会えず、中学1年の頃にやっと再開出来的たのだが、昔の様にはいかなかつたとの事。

近衛からの話が終わり、俺達の周りが静寂に包まれる。
声を掛けようにも掛けられないと言つた状況だ。

「何かウチ、悪いコトしたんかなあ。……せつひやん、昔みたく話
してくれへんよーになつて……」

「このか

「このかさん

「……」

笑顔だが、その近衛の目には薄い涙が浮かんでいた。辛いつて事が
伝わってくる。

あの野郎……こんなに待つてくれている友達がいるつてのに。泣か

セービングあるんだよ。

「やつぱりの方が動きやすいな」

俺はネギと神楽坂と別れて部屋に戻った。連中が近衛を連れ去る所としたつて事は、そのまま終わる気は無いつて事だ。

また襲撃があるかもしれないと思つた俺は浴衣から動きやすい私服に着替えた。そしてサーべルを持ち、二三里辺一帯をとつあえず偵察する事にした。

「なるべく新田とかには見つからないようにしてとかないとな。外寒そうだし、コート着ていいくか」

買つておいた黒いコートを羽織り、旅館の出入口に向かう。すると、通りかかったロジーでネギ、神楽坂、桜咲の3人が話していた。

「あつ、恐山さん。何処かへ行くんですか?」

「偵察だ。連中がまた襲つてくるかもしけねえからな。お前等は何を話してんだ?」

「桜咲さんに、襲つてきた敵について教えてもらつてたのよ」

成る程。敵の事を知るのはとても重要だ。

ん？ 一般人の神楽坂に教えても良いのか？

大丈夫だぜ。アスナの姐さんは兄貴のパートナーだからな。ついでに恐山の兄貴の事も話しておいたぜ

「まさかアンタもだつたとはね。正直驚いたわ」

いやいや、俺もお前が関係者で驚きだよ。

ついでに後から来た俺も、桜咲に関西呪術協会の事について簡単に説明してもらつた。

大体は理解出来たが、敵の内情も複雑のようだつた。

「よし！ 3・A防衛隊の結成です！！ ガーディアンエンジェルス 関西呪術協会からクラスのみんなを守りましょう！！」

何か妙な部隊が結成されたなあ。

ガーディアンエンジェルスか……神楽坂はその名前にしきりに文句を言つていた。

だが、俺的には

「その部隊名……良いな」

「ですよね！ ですよね！」

「ええ～……」

いいじやねえか、某有名ロボットゲームに出てきそつな名前でよ。神楽坂と桜咲がジト目で見ているが、とりあえず無視する。

「早速僕、外の見回りに行つてきます！」

ネギが勢いよく外に飛び出していった。

俺もネギと一緒に見回りつかと思つたが、今すぐに話したい奴がいるから止めておいた。

「桜咲。ちょっと話したい事があるんだが、時間良いか？」

「あ、はい。それじゃあ神楽坂さんは、先に部屋に行つて下さい」

「うん。分かった」

ネギも外に行き、神楽坂も部屋に行つたのでロビーニには俺と桜咲の二人だけだ。

互いに向かい合つて座り、沈黙が続く中で俺は口を開いた。

「お前……友達なのにいつまで近衛を悲しませる気だよ？」

「！？ そ、それはどういう意味ですか？」

「近衛から全部聞いた。小さい頃によく遊んだ友達だつて事、近衛にとつて初めての友達だつて事をな」

「…………」

桜咲は黙つたままだが、俺は話を続ける。

「お前が昔みたいに話してくれるのを今でも待つてゐるんだぞ。良い友達じゃねえか。なのに何でお前は友達を悲しませんか？」

「わ、私も考えました……何度もお嬢様に話しかけようと、話そうと思いました。けれど……私はお嬢様とは違うんです」

「何が違うんだ？ 同じ人間じゃねえか。違う所なんか一つも……」

「違うんですッ！！ 何もかもッ！！」

「 ッ！」

「私は……人外の者なんです。化け物なんです。だから……お嬢様の側にはいられません」

……」いつも俺と同じじつて事か。

俺も確かに人間とは言い難いが、コイツの方が幾分人間らしい気がする。

ちなみに言えば、どこら辺が化け物なのか教えて欲しいくらいだ。

「そうか。それじゃあ俺も言うが、俺もお前と同じで人間じゃない。けどよ、それってそんなに気にする事か？ 逆にお前が気にしそぎなんじやねえか？ 自分の事を話せないって事は友達を信じてないからじやねえのか？」

「そ、それは……」

桜咲の表情に、動搖の色が広がる。

「拒絕された時の事ばかり考えてたら前に進めねえよ。時には勇気を出して話してみる事も大切だ。お前をずっと待ってる友達は、近衛は簡単にお前の事を拒绝する奴なのか？ 仲良く遊んでたんだろ？」

「お嬢様は……このちゃんは……」

顔が俯き、身体がブルブルと震えている。
今までの事を思い出しているのだろうか。

「近衛は良い奴だ。昔の友達をずっと待ってる奴なんか今時いないぞ。お前が訳を話せばきっと分かってくれるぜ。お前とまた昔の様に話したいって、泣きながら言つてた。あいつの気持ち、分かってやれ」

「どうして……どうして……恐山さんはそこまで私とお嬢様の事を気に掛けてくれるんですか？」

眼尻に涙を貯めた桜咲が訊いてきた。

俺は自嘲気味に笑うと、白い天井を見て言つた。

「そうだな……お前が昔の俺と似てるから、かな？」

「……えつ？」

「お前と同じよつこ、周りを避けて、バカばっかりやつてた俺と……な

「……」

俺が吹いた言葉を終わりに、この場に何とも言えない雰囲気が流れた。

俺も桜咲も、沈黙を守つた。それから数分後、俺はこの場を切りあげた。

「悪かつたな。俺から誘つておきながら、最後は有耶無耶にしちまつて」

「いえ……気になさらいでください」

「とにかく、俺が言いたかったのはそれだけだ。後は、お前の気持ち次第だ。上手くやれよ」

「…………はい」

そう吹くと、桜咲は神楽坂が待つている部屋に向かつた。

俺つて奴あ、自分の事を棚に上げちまつたな。

まあお節介な話も終わつたし、俺も偵察に行くとするか。先に行つたネギの後を追いかけないとな。

【SIDE・俺】

桜咲との話が終わった俺は、先に見回りに飛び出して行ったネギを探しつつ、辺りの偵察をしている所だ。

ふう……「マークを着てきて正解だつた。やっぱり夜はなかなか冷える。

それにしてもネギの奴、何処に行つたのかな？

「そんな遠くには行つてないと思うんだけどな。でもあいつ、まだ小さい子供だし」

まあ喋れるオコジョも付いているからあまり心配はいらないか？変な奴に絡まれてもオコジョが怒鳴れば、裸足で逃げて行くだろう。

「もう少しこの辺りを……ん？ 何だありや？」

前方から何かが猛ダッシュでこちらに近づいてくる。人か？ いや、普通の人間にしてはでかすぎる。それに心なしか、尻尾も生えている様な……。

「あら、ごめんやす」

「なつー？」

猛ダッシュで近づき、俺の上を勢いよく飛びこえていったのは……猿だった。

しかも飛びきりデカイ大猿であり、口の中にはメガネを掛けた女の

顔があつたし、喋つた。

京都にはあんな気持ち悪い妖怪が出るのか？

しかしあの大猿、何かを抱えていた様な……。

「もしかしてあの大猿、関西呪術協会の……」

「え、いッ！？」

「なつ！」

突然間抜けな声と共に、俺は何者かに剣で襲撃された。もう少しサーべルのガードが遅かつたら、一の腕を切断されていたかもしれない。

「こきなり仕掛けてくるとはな。何者だテメエ……」

「どうも、おはつに。神鳴流剣士の月詠です～」

神鳴流剣士……桜咲と同じ流派か。

……全然そとは見えねえ。間抜けな格好だし、喋り方も気が抜ける様な喋り方だ。

「何で俺を狙う？」

「雇い主さんから貴方の足止めを頼まれました。お兄さんからは何か異様な力を感じるのでやつかいそuddだから、そう言つてましたえ」

なるほど、関西呪術協会の連中はアホばっかりじやないらしい。ちゃんと頭の回る奴が居るつて事か。

「ウフフ……お兄さん、強そだから楽しみや。本気でいかせても
らいますわ」

月詠とか言つこのメガネチビ女は持つてゐる2本の刀を構え、姿からは想像もつかない程の殺氣を放つた。
さつき俺を斬りつけてきた太刀筋からも解つたが、コイツ……なかなかの使い手だな。

「へえ～お前も結構やる様だが……俺にはまだ及ばねえよ。チビ女

俺も被せていた布を外し、サーベルを構える。

足止めつて事は、連中はもう何らかの行動に出でるつて事だ。
あくまで想像だが……あの大猿が怪しい。

ネギ、神楽坂、桜咲、近衛の4人は大丈夫なのか？

「とおー…」

先手を取つたのはチビ女の方、左に持つた長刀で突きを入れてきた。
すかさず俺はサーベルで防ぐが、もう一方の短刀で斬りつけてきた。
その攻撃を俺は右手で女の手を掴み、ギリギリで斬られるのを防いだ。

「2刀流か……扱いが上手いじゃねえか」

「お褒めに頂いて光栄です～」

俺とチビ女との壮絶な斬り合いが続くが、俺はこのチビ女に付き合
うつもりは毛頭ない。

4人が心配で今すぐにでも旅館の方に戻りたいが、コイツがそうさせ
てはくれない。

ちつ！ 状況が知りてえ、詳しい状況が。

「お嬢様一ツ……」「このか一ツ……」

あの声はネギ達だ。あいつらは無事だったんだな。だが近衛の名を呼んでるって事は……もしゃー……

「ネギ！ 神楽坂！ 桜咲！ どうした！？ 何があつた！？

「恐山さん！？」

「お嬢様が……お嬢様が攫われました！」

ちくしょう！ やつぱりか！

ちつ……事態は最悪つて事だな。

「よそ見はあきまへんよ、お兄さん」「なにつ！？ ぐおつ！」

飛びかかってきたチビ女の長刀が俺の右腕を貫き、血が滴り落ちる。くそつ！ ついよそ見をしちまつた。俺もトレーニングが足りない。

「きょ、恐山さんッ！？」

「俺に構うな。お前等は近衛をさらつた奴を追え！ 俺もこのチビ

女を倒したら、すぐにお前等の後を追う。だから行け！！」

「で、でもアンタ！？ そんな大ケガを負つて、戦えるわけないじゃない！？」

「アホか！ 俺に構つてたら、近衛を取り返せなくなるぞ！ 状況を考えて、今やるべき事をやりやがれ！」

俺が大声で怒鳴ると三人は俯いた。

本当は俺を見捨てたくないのだろう、手がブルブル震えている。

「…………分かりました。恐山さん、必ず追いかけてきて下さい。

必ず、必ずですよ」

「ああ、任せとけ。約束は必ず守る」

悔しそうに顔を歪めながらも三人はこの場を後にした。
俺は三人が去ったのを確認し、腕の出血を確認する。
出血は少し多いが、腕は充分に動かせる。

元TFFで本当に良かつたぜ。

常人ならとっくに倒れてるな、こりゃ。

「茶番はお終いですか？。ほなら、再開といきましょ。戦いの続きを」

薄気味悪い笑みを浮かべやがる。

……やつさと終わらせるか。

今の俺にはコイツに長く付き合つてやれる程の時間がねえ。

「俺はな、テメエみたいな奴を見ると虫酸が走るんだ。特に、戦いを遊びとしか思つてない奴はな！」

俺は叫んだと同時に、チビ女との距離を詰めようと接近した。チビ女は長刀で縦に斬りつけ、反撃をしてくる。

軽く額を斬られたが、次に来るであろう短刀での攻撃を右手で掴んで封じる。

距離を詰める事に成功した俺は左手に持つたサーベルを捨て、鳩尾に拳を打ち込んだ。

「力……ハツ……」

「あ痛……つたく、未恐ろしいチビ女だぜ」

刀を落とし、鳩尾を押さえてチビ女はうづくまつた。かなりの勢いで打ち込んだので呼吸が上手く出来ないのだろう、とても苦しそうだ。

「まあ……そのまま大人しくしとけ。無理に動くと痛むし、呼吸も出来ねえぞ」

「ハツ……まつ……まつて……」

微かに聞こえるチビ女の声を無視し、捨てたサーベルを持って俺はネギ達の後を追う。

あいつら……無事なのか？

電車に乗り、駅に着いた俺は降りて先に進む。何故俺が迷わずに後を追えたかと言うと……先に行つた三人が残していくてくれた光るマークがあつたからだ（ちなみにマークはオコジョの形であり、降りるべき駅の看板にも付けていつてくれたのでかなり助かつた）。

「あいつ等は……いた！！」

奥に進み、沢山の階段がある所に差し掛かると戦つてゐる二人を見つけた。

神楽坂はやたらと大きい熊と戦つてゐし、桜咲はメガネを掛けた長身の女と対峙していた。

「お前等！ 無事か！！」

「恐山さん！」

恐山の兄貴！ 来てくれて助かるぜー！

「おう。約束は必ず守るって言つたろ？」

ネギの頭に手をポンと置き、俺は神楽坂の元へ向かう。果敢に戦つてはいるが、危なつかしくて見ていられない。ここは桜咲の援護に向かわせるのが無難だろう。

「ほら、お前は桜咲を助けに行つてやれ。この熊野郎は俺がやる」「何言つてんのよー アンタ、前に会つた時より傷が増えてるじゃない！ それに血も……」

「大丈夫だ。俺はこんな事で死なねえよ。さつと行け！」

神楽坂を桜咲の元に行かせ、俺は熊野郎と対峙する。間抜けな姿だが、敵は見かけで判断するなつて事をさつきも思い知らされたばかりだ。

油断せずに行くか！

それと……あえて言わなかつたが、神楽坂つてハリセンで戦うんだな。

「おひああー！」

俺は空中に飛び上がり、熊野郎の頭目掛けてサーベルを振り下ろした。

だが、熊野郎の爪で受け止められてしまつた。

【クマー】

「負けるか……ぐおおおお……」

力を入れ、サーベルを受け止められた爪を弾いて一気に斬り下ろした。

結果、熊野郎は縦に真つ二つに両断され、煙になつて消えた。

「……『イシ』は見てくれだけだな」

熊野郎を片付けた俺は神楽坂達の方を見た。どうやらまだ近衛は助け出せていない様だ。

よく見ると、メガネ女は近衛を自分の身を守る盾にしている。神楽坂と桜咲もそのせいで敵を攻撃出来ず、ネギもどうすれば良いのか迷っている。

それにあのメガネ女の面、何所かで見たような……。

あつ！ あの時の、サルの口から見えた女だ！

「テメエ、前に俺が見たあの大猿だろー！ 近衛を盾にしやがって、卑怯だぞ！」

「ホホホ、そういうえば会いましたなあ。ウチは近衛お嬢様を持ち帰れるのならどんな手でも使つたるわ。それにしてもアンタ強いなあ。風呂場で見た時にただ者やないと思うて月詠はんに足止めを頼みましたけど、ここに来ないと言う事はやられたんやな。それに熊鬼もあつという間に倒してしもて、感服するわ」

「やかましい。テメエに褒められても、ちつとも嬉しくはねえんだ

よ

「い……いのかをひとつもつなのよ……」

神楽坂の問いにメガネ女はチビ女と同じく「に薄気味悪い笑みを浮かべた。

あの笑み……虫唾が走るほど、本当に氣に入らねえ。

「せやなー……まずは呪薬と呪符でも使て口を利けんよこして、上手いことウチらの言つ口トを聞く操り人形にするのがえーな。くつくつくつ……」

あの女……俺の田の前でそんな事を言つなんてスゲー度胸があるじやねえか。

もちろんネギ、神楽坂、桜咲も俺と同じ気持ちだらつ。

あの女に対する怒りつて言つ気持ちに、な。

「こ」のまま逃げられればウチの勝ちやな。ほなー、ケツの青いクソガキども

その言葉を最後に俺の中の何かが完全にブチ切れ、メガネ女に向かつていつた。

ネギ達も同じタイミングだつた。

ネギが呪文を唱えてメガネ女の服を消し去り（近衛の浴衣も一緒に消え去つてしまい、宙に浮いて墜落しそうになつたが、ネギが魔法で浮かせたので墜落せずに済んだ）、その後を神楽坂が頭をハリセンで叩き、最後に桜咲が得意の神鳴流剣技で吹つ飛ばした。

「な、なな……」

「おいテメエ……」

「ヒイー！？」

吹つ飛ばされて参つてるメガネ女の首根っこを掴み、サーベルを頬に当たた。

メガネ女は完全に俺の姿に怯えている。

なんせ怒りレベルMAXで睨みつけ、右腕と額から血を流しているから迫力は満点だらう。

「またこんな事をしてみやがれ。次からは完全にぶつ潰してやるからな」

「ヒイ……」

手を離してやるとメガネ女は何処からともなく札を取り出し、額に2と書かれた大猿を呼び出した。

その尻尾に掴まり、「お、おぼえてなはれー」と小悪党にお決まりのセリフを言つて空中に飛び、逃げていった。

「あいつめ……」

「追つ必要はありません。神楽坂さん」

確かに。追いついたとしても、敵が待ち伏せしているかもしれない。深追いは禁物だ。どんな戦場においてもな。

敵を追い払つた俺達は倒れている近衛の安否を確認する。

メガネ女が言つていた呪薬や呪符なんか使われていなか心配だ。

「！」

「！」

「お嬢様！ しつかりして下せこ！ お嬢様！」

俺は静かに様子を見守る。！」この場面はどうにも苦手だ。

俺が経験してきた中では、この場面は最悪の結果しか待つていな

かつたが……。

「ん……せつちやん……？」

「お嬢様……」

「あーせつちやん……ウチ、夢見たえ……。変なおサルにさらわれて……でもせつちやんやアスナ、ネギ君や恐山君が助けてくれるんや……」

「ふう……良かつた、いつもの近衛だ。
どうやら最悪の結果は免れたようだ。」

「もう大丈夫です。このかお嬢様……」

桜咲は安堵の笑顔、ネギと神楽坂もホッとした様子だ。
本当に良かつたな、お前等。

ん？ 近衛が何か言おうとしているな。

「よかつたー。せつちやん……ウチの口ト嫌つてゐ訳やなかつたん
やなー……」

「えつ……そりや私かで、このちやんと話し……！？」

どうやら桜咲は俺の視線に気付いたらしく。
良いタイミングだ、言え！ 仲直りしろ！
近衛ならきっとお前の事を解ってくれる！

無論、ネギや神楽坂もな。

【SIDE・桜咲刹那】

恐山さんの視線を感じる。そして、恐山さんが私に話してくれた事が頭の中を駆け巡った。

勇気を出して……お嬢様を信じて……受け入れてくれると言じて……全てを話すこと。

そう思った時、私の口は自然と開き、言葉を紡ぎ出していた。

「…………お嬢様、お嬢様に聞いてもらいたい事があります。もちろん他の人達にも」

「話そう……話してしまおう。

このままお嬢様を悲しませるなら、泣かせてしまうなら、いつそ話してしまうおつ。

そして拒絶された時は……潔く、お嬢様の目の前から消えよう。

「お嬢様……私は化け物なんです！ 人間じゃないんです！」

「えつ…………？ せつちゃん…………？」

「これを…………これを見て下さい…………」

私は見せた。私が化け物であると言つ証拠を。人間ではないと言つ証拠を。

鳥族のハーフである証拠を、白い翼を……。

「これが私の正体……化け物です。今までお嬢様から逃げていたのは……嫌われるのが怖かったからなんです！」

私の周りだけ無音の世界のような感じがした。
お嬢様の目を見るのが怖い……周りの目が怖い。

「でも……お嬢様を守りたいという気持ちは本当です！……こんな私
でも……化け物の私でも受け入れて下さるなら……これからも……
護衛に付かせて頂けませんか……」

怖い、とてもなく怖い。

これから返つてくる言葉が怖い、耳を塞ぎたい。

「えいっ！」

「あ痛……お、お嬢様？」

お嬢様が突然私の頭を叩いた。

予想外の行動に、私はすぐに対応が出来なかつた。

「アホやなあ……せつちゃんは」

「お嬢様……」

「ウチがそんなコトでせつちゃんを嫌いになる訳がないやん。キレ
ーなハネ……天使みたいやん」

私のこの姿が……綺麗？

お嬢様が……このちゃんが……私を……。

「それに……どんな姿をしてても、せつちゃんはせつちゃんやろ？
ウチ、絶対嫌いになつたりせーへんて」

ああ……私の目に涙がこみ上げてくるのが分かる。
心の片隅でひつそり期待していた答えを……お嬢様が言つてくれた。

「ウチ……ウチ……お嬢様の……」のちやんの側にいてええの？」「当たり前やん。また昔みたいに遊んだり、話したりしよう。せつちやん」

「！」のちやん……ウツ……ウツ

私の目から涙が溢れ、頬を伝づ。嬉しくて堪らない。このちやんが受け入れてくれたのが、嬉しくて堪らなかつた。

「ネギ君も、アスナも、恐山君も、せつちやんのコトを嫌わんといで。お願いや」

「そんなの当つたり前よ！ それに、翼が背中から生えてるなんてカッコイイじやない！！」

「僕も嫌う訳がないです！ 綺麗ですよ、桜咲さん」

ネギ先生も、神楽坂さんも、ありがと「」がこます。……恐山さんは、どうなのでしょうか。

「……嫌いになつたりしねえよ」

後ろを向いていました。どんな表情をしているか、少し気になりました。

何故か分かりませんが……ダイノさんは受け入れてくれたと、そう感じました。

良かつた……本当に良かつた。今の私はこれ以上なく幸せだ。

【SIDE・俺】

近衛と桜咲が無事に仲直りした。昔の仲に戻った。

俺はこの出来事が、何故か自分のことのように嬉しかった。こりやあ俺つて本格的にサイバトロン色に染まっているな。

そんで今俺達は寒い中、旅館に帰つていろいろである。

近衛はネギの魔法で服が消えて全裸だった為、俺のコートを着せてやつた。

更に言えば、俺の負つた傷はネギがこっそり魔法で治してくれた。

「あ、あの……恐山さん」

「ん？ 何だ桜咲」

先頭を歩いていた俺の隣に、オズオズと桜咲が寄つてきた。
何だか変に狼狽してねえか？

「あ、あ、ありがとうございます。貴方が言つてくれなければ、私は……」

ああ、お礼か。別にお礼されることはない。

出来たチャンスを桜咲自身が生かしただけのことだ。

昔の俺には、なかなか出来なかつたことを、桜咲はやつてのけただけだ。

「別に。近衛に全てを告白する勇気を持てたのはお前の力だ。修学旅行は長え。これからたつぱり、近衛や他の奴等と遊べばいいじゃねえか」

「恐山さん……はい……」

元気よく返事をした桜咲に俺は自然と笑顔になるのを感じた。

良い事をすると気分が良いってのはどうやら本当らしい。昔の俺には考えられない事だな。

修学旅行初日は疲れたが、色々と充実した日だつたな。

あ～…… そうだ。

今頃旅館内を見回ってる新田からどう逃げようかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9446c/>

Life Is Reborn

2010年10月9日03時48分発行